

1981

下小平遺跡

長野県佐久市岩村田下小平遺跡発掘調査報告書

昭和56年3月

長野県佐久市教育委員会

序

佐久市教育委員会

教育長 浅沼 驚

当該、下小平遺跡は社会福祉法人いづみ会により特別養護老人施設福寿園が建設される運びとなり、これに伴なって破壊が余儀なくされる事態となり、緊急発掘し記録に止めることとなりました。この付近地一帯は上小平遺跡、棟敷遺跡、蛇塚古墳等を含め夙に弥生時代から平安時代にいたる間の土器片が多量に表面採取されその分布について刮目されておりました。本調査も緊急性の高いものであり且つ又予算は勿論のこと調査期間も総日数四十八日間と短期間で制約されたものでした。

団編成も最少限の人員をもってあたることを余儀なくされ、佐久市教育委員会林を発掘担当者とし、佐久考古学会有志のスタッフによるものでした。本地点も全貌把握においても局限、短絡したものではなく近傍遺跡群との濃密な相関性を有するであろうことは、容易に察知するところでした。

当該遺跡の立地については、湯川東岸の河岸段丘で上位段丘には前述遺跡が所在して一連、一帯性をもっている訳です。

調査の當として自然気象条件の影響がその進捗を左右することは言を俟ちませんが雨期にも拘らず散水しプラン確認をしたり、反面測量日程に連日降雨という難作業の連続でした。併しながら調査員と協力者が一体となり意欲的な調査が進められたことは特筆に値するものと深謝いたします。

確認結果は、弥生時代住居址5棟、土壙14基、また弥生時代より古墳時代への過渡期の方形周溝墓1基と古墳時代へ移行し初頭のそれも1基等であわせて壺、甌、高环、坏等々多数の出土を得て調査成果と遺跡実証について高い評価がなされて然るべきと考えます。

末筆ながら本調査に終始ご助言とご指導を下さいました県教育委員会文化課指導主事の先生方、並びに先学各位、また調査員、補助員発掘協力者各位に改めて深謝申し上げましてご挨拶いたします。

例 言

1. 本書は昭和55年5月29日より昭和55年7月16日までに渡って発掘調査された佐久市岩村田に所在する下小平遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は佐久市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、林幸彦を発掘担当者とし、佐久考古学会有志より調査団を編成して実施した。
4. 本書に挿入した遺物実測図は、羽毛田伸博・飯島篤・三石宗一が主に行い、トレースは茂木智里が担当した。
5. 本書の執筆者は各遺構の文末に記し、編集は工藤かよ子が担当した。
6. 本調査の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、発掘調査及び報告書作成においては、先学の各位より多大な御指導・御助言を賜り、地元の方々の物心両面にわたる御協力に対し厚く御礼申し上げる。

凡 例

1. 各遺構の略号は次の通りである。
弥生時代住居址—Y、古墳時代住居址—H、方形周溝墓—HM、土壙—D、溝状遺構—M
2. 住居址の実測図は縮尺 $\frac{1}{20}$ 、炉・カマドは $\frac{1}{10}$ 、方形周溝墓 $\frac{1}{150}$ に統一し、異なる場合は明記す。
3. 土器・石器の実測図及び拓影図の縮尺は $\frac{1}{2}$ 、小形品は $\frac{1}{4}$ に統一してある。
4. 土器実測図におけるスクリーントーンは赤色塗影を示す。遺構平面図に使用したものは、炉・カマドの範囲である。
5. 遺構断面図の水系レベルは各遺構毎に統一し、標高を記した。
6. 遺物の出土地点は住居址を4分割し、北東区をI区、北西区をII区、南西区をIII区、南東区をIV区とした。
7. 図版中の遺物の縮尺は約 $\frac{1}{2}$ であり、小形品は約 $\frac{1}{4}$ である。本文中及び図版の遺物番号を簡略化した。例えば「第8図1」は「8-1」。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	1
3 発掘調査日誌	2
II 遺跡の環境	4
III 層序	7
IV 遺構と遺物	8
1 住居址	8
1) Y 1号住居址	8
2) Y 2号住居址	11
3) Y 3号住居址	20
4) Y 4号住居址	24
5) Y 5号住居址	28
6) H 1号住居址	29
2 方形周溝墓	31
1) HM 1号方形周溝墓	31
2) HM 2号方形周溝墓	33
3 土壙	38
4 溝状遺構	40
1) M 1号溝状遺構	40
2) M 2号溝状遺構	40
5 グリット・トレーナー・表採遺物について	40
V 総 括	43

引用参考文献

挿 図 目 次

第1図 下小平遺跡地形及び設定図	1	第24図 Y 4号住居址出土遺物実測図 〈その2〉	28
第2図 調査経過図	3	第25図 Y 5号住居址実測図	28
第3図 周辺遺跡分布図	5	第26図 Y 5号住居址炉実測図	29
第4図 署序模式図	7	第27図 Y 5号住居址出土遺物実測図・拓影図	29
第5図 Y 1号住居址実測図	9	第28図 H 1号住居址炭化材出土状況	30
第6図 Y 1号住居址炉 1(北) 実測図	9	第29図 H 1号住居址実測図	30
第7図 Y 1号住居址炉 2(南東) 実測図	9	第30図 H 1号住居址出土遺物実測図	31
第8号 Y 1号住居址出土遺物実測図 〈その1〉	10	第31図 H 1号住居址カマド実測図	31
第9図 Y 1号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その2〉	11	第32図 H M 1号方形周溝墓実測図	32
第10図 Y 2号住居址実測図	13	第33図 H M 1号内D 1号土壤実測図	32
第11図 Y 2号住居址炉 1(北) 実測図	14	第34図 H M 2号方形周溝墓実測図	34
第12図 Y 2号住居址炉 2(南東) 実測図	14	第35図 H M 2号方形周溝墓遺物分布図	35
第13図 Y 2号住居址遺物分布図	15	第36図 H M 1・2号方形周溝墓 出土遺物実測図	36
第14図 Y 2号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その1〉	17	第37図 H M 1・2号方形周溝墓 出土遺物実測図・拓影図	37
第15図 Y 2号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その2〉	18	第38図 2号方形周溝墓・M 1号溝状遺構 出土遺物実測図・拓影図	38
第16図 Y 2号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その3〉	19	第39図 D 3号土壤土層断面図	39
第17図 Y 3号住居址実測図	20	第40図 D 14号土壤実測図	39
第18図 Y 3号住居址炉実測図	21	第41図 D 10・11・13号土壤、M 2号溝状遺構 実測図	39
第19図 Y 3号住居址出土遺物実測図 〈その1〉	22	第42図 M 1号溝状遺構土層断面図	40
第20図 Y 3号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その2〉	23	第43図 土壤・溝状遺構・グリッド・トレンチ 表様遺物実測図及び拓影図	41
第21図 Y 4号住居址実測図	25	第44図 同 上	42
第22図 Y 4号住居址炉実測図	26	第45図 下小平遺跡全体図	44
第23図 Y 4号住居址出土遺物実測図・拓影図 〈その1〉	27	第46図 他遺跡ベット状遺構実測図	

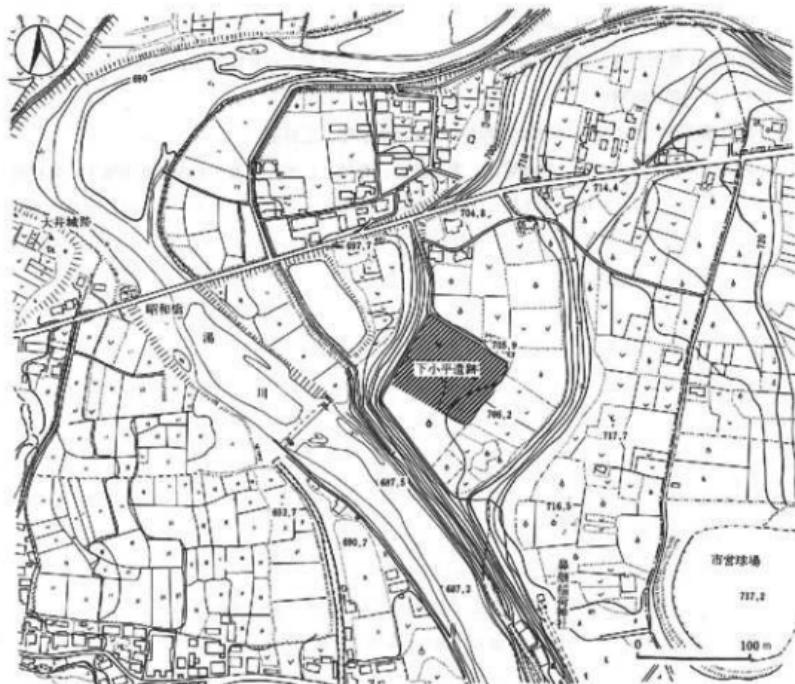
I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機

下小平遺跡は、湯川東岸の河岸段丘上に位置しており、弥生時代～平安時代の土器片が多量に表面採集されていた。また、上位の段丘には上小平遺跡や棟敷遺跡、蛇塚古墳等が所在しており、数多くの遺跡が分布している。

本遺跡は、昭和55年度社会福祉法人いづみ会による特別養護老人施設福寿園建設工事に伴い、破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存を要するに至った。

佐久市教育委員会は、長野県教育委員会文化課の指導を受けながら記録保存することとし、発掘担当には林幸彦があたり、昭和55年5月29日より発掘調査を実施する運びとなった。（事務局）



第1図 下小平遺跡地形図及び設定図（1：5000）

2 発掘調査の概要

遺跡名 下小平遺跡（しもこだいら）

所在地 長野県佐久市岩村田字下小平

発掘調査期間 昭和55年5月29日～昭和55年7月16日

調査に関する事務局 浅沼 駿 佐久市教育委員会教育長

市川 弥四郎	"	社会教育次長
白田 幸作	"	社会教育課長
井出 喜平	"	社会教育係長
堀内 美喜男	"	社会教育係

調査団の構成

團長 浅沼 駿

担当者 林 幸彦（社会教育係）

調査員 井上行雄、大井今朝太、工藤かよ子、黒岩忠男、白倉盛男、羽毛田伸博、三石延雄
森泉定勝

調査補助員 小山岳夫（専修大学生）、佐々木宗昭、三石宗一

発掘協力者 青木久子、岩崎房江、北村辰三、北村よしの、並木ことみ、丸山勝子（岩村田地区）市村千世、大井恵美子、佐藤栄子、須藤久米子、須藤房子（根々井地区）白田その（小宮山地区）岩村田高校社会班（大井哲夫、柳沢篤他班員）

浅間中学校生徒

整理作業協力者 魚島篤、神津敦、茂木智里

3 発掘調査日誌

発掘調査は、昭和55年5月29日より昭和55年7月16日に渡る間の総日数48日の内、実質作業日数は43日を要した。

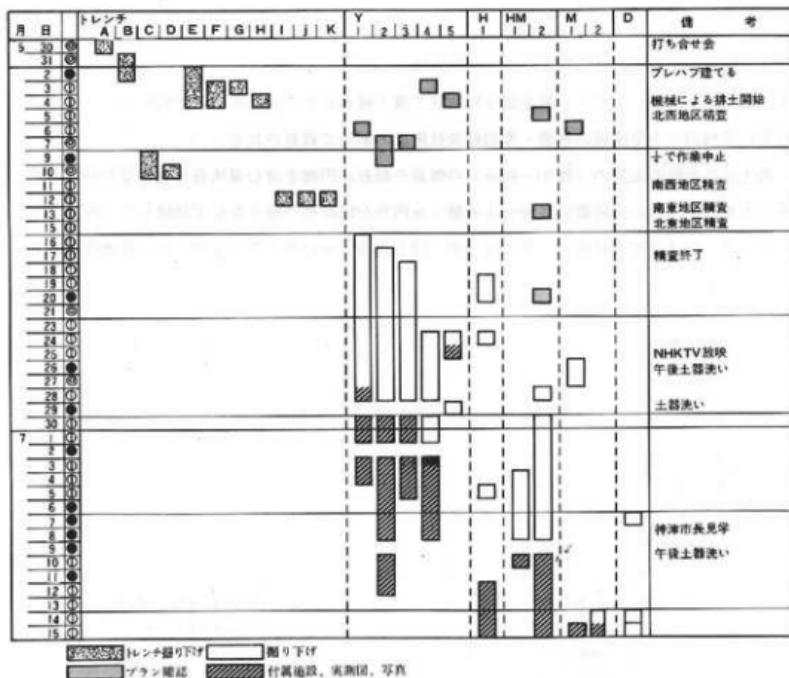
前半は梅雨期にもかかわらず晴れて雷も鳴り、大変に暑い日々であった。遺構にも度々散水し・プラン確認や写真撮影を行った。後半は連日雨模様。測量と併行しての作業であるため進行せず遅れを招いた。厳しい日程の中全員雨具を持参して励んだ。

5月29日に機材を搬入しテントを張る。翌30日は打ち合せ会議と調査団の結団式がなされた。日程・調査方法等について検討し、調査区域全面耕作土の除去とし、耕土を置くために堆積部にまずトレンチを設定して遺構の有無を確認する事とした。計11本の中で土壙2基、住居址3棟の黑色範囲を確認した。トレンチは、5月31日から6月12日まで掘り下げた。併行して6月3日より

重機による全面耕作土除去を開始。同時に精査作業を進行させ、6月17日に耕作土の除去と精査作業を終えた。プラン確認の結果、全体で住居址6棟・土壙13基・方形周溝墓2基・溝状遺構2基を検出し遺構名を命名した。

遺構の掘り下げは、6月16日にY1号住居址より始め、順次他の住居址・土壙等々進めた。Y1・2・4号住居址は長軸が9m前後の大形の弥生時代の住居址で、掘り下げや遺物分布図の作成等に時間を要し、方形周溝墓の周溝も深く中々大変であった。7月15日には発掘作業を終了し埋め戻しをした。その後、昭和55年11月より遺物・図面整理を行い、翌年2月より福集・刊行。

調査団と協力者が一体となり、よりよい発掘調査にしようと一致団結し、全員で古代生活の再現のために努力した。今回の調査は交通も比較的便利であり、水にも恵まれ、発掘調査の成果も多大なものがあった。ただ、時間的に猶予されなかった事は誠に残念であった。



第2図 発堀調査経過図

II 遺跡の環境

1 下小平遺跡付近の地形地質の概要

浅間火山の東南麓標高1400m附近千ヶ瀬に源を発する湯川は、南流して中軽井沢に至る間は比較的急流で、それより下流は傾斜は緩やかになり南軽井沢で碓氷峠から流下する小流を合流して、方向を南西に変えて森泉山(1435m)の裾合末端に深い谷を作っている。この附近から川底は極端に蛇行をくり返して両岸に2~3段の河岸段丘を形成して肥沃な耕地を作っている。岩村田附近からは谷底は広くなるが蛇行は続き、落合部落西方で千曲川に合流している。

下小平遺跡はこの岩村田東方の谷底がようやく広くなった湯川が大きく西に蛇行して、左岸に河岸段丘を3段作っている中の狭い第2段上に位置している。

この附近の基盤地質は浅間火山の古い噴出物火山弾・火山砂礫・軽石・火山灰の水中堆積層である湯川層が堆積しており、最上部は軽石流で薄く被われている。その典型的断面は下小平西方対岸の岩村田~上平尾道の堀割・鼻顎橋荷社附近の断崖で観察される。

最下底に比較的大型の(径20~40cm)の熔岩や軽石の円礫を含む凝灰質集塊岩層が10m内外、その上部に10~20cmの同質の砂礫火山灰層1m内外がほぼ水平層をなして堆積している。

段丘第一段は谷底堆積面で、第2段は第3段と比高1m内外の差しか残さない浸蝕面である。

(白倉盛男)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所 在 地	立 地	縄 体	古 聖	備 考
1	下 小 平	岩村田字下小平	河岸段丘	○ ○		本調査
2	上 下 平	岩村田字上小平	*		○	
3	後 敦	安原字後敦	古 地	○ ○ ○		後段古墳存在
4	蛇 川 A	安原字蛇川	河岸段丘	○ ○		
5	蛇 川 B	新子田	*		○	昭和54年度調査
6	岩村田遺跡群	岩 村 田	*	○ ○ ○		東に大井城跡あり。昭和54・55年度一般調査
7	上 / 城	岩村田上ノ城	*	○ ○ ○		昭和48年度調査
8	一 本 桧	岩村田一本桜	*	○ ○ ○		昭和47年度調査、一本桜古墳存在
9	北 西 久 保	岩村田北西久保	*	○ ○ ○		昭和54年度確認調査
10	清 水 田	岩村田清水田	高 地	○ ○		昭和55年度調査
11	鹿 肩 畑 B	長 土 岳	*	○ ○		昭和55年度調査
12	鹿 肩 畑 A	*	*		○	昭和54年度調査
13	荒 穂 古 游 路 群	岩村田字荒穂古游路	*	○ ○ ○		



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

2 歴史的環境

下小平遺跡は、湯川の東岸の河岸段丘上に所在する。前述のように湯川は浅間山に発し、その両岸に急峻な断崖を形成している。この断崖に面した平坦地縁辺には数多くの遺跡が知られている。軽井沢町から御代田町の豊界に至る間繩文時代の遺跡が主であり、佐久市内にあっては大部分が弥生～平安時代のもので繩文時代は下流の落合付近に見られるものの他所は散在的な分布である。また、横根の30余基を数える群集墳（塚原・上の原・輪子古墳群等）や東一本柳・北西久保古墳群等の古墳も湯川に面している。

さて、本遺跡は湯川の第2段丘上にあり、第3段丘上には上小平遺跡が、さらに上位の台地上には桟敷遺跡が南北に細長く所在する。付近の遺跡を時代別にみてみると、安原の池の前遺跡、下平尾の山伏木遺跡では、多量の繩文時代中期の遺物が出土している。弥生時代では、新子田の戸坂遺跡で後期の住居址1棟が検出されている他に、高杯・甕等非常に豊富な遺物が出土している。和田上南遺跡では、中期の住居址等5棟が検出され、さらに和田上遺跡は後期の土器等が多量に表採されており、大きな集落の存在が予想される。また、猿久保の野馬窪遺跡でも広範囲に渡って甕・壺・高杯等後期の遺物が表採されている。

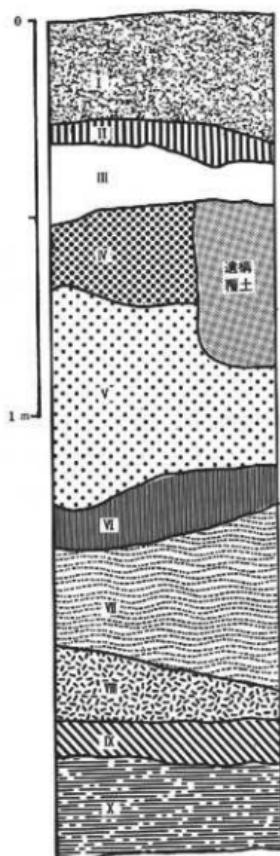
古墳時代になるとこの地域も佐久市内の他地域と同様に遺跡は増加し、上小平・桟敷・戸坂・和田上・野馬窪遺跡等があり、集落址の存在が予想される。これらの遺跡の既出遺物は主に古墳時代後期であり、同時期の古墳として桟敷古墳、蛇塚古墳（2基）、和田上古墳が存在する。平安時代では、さらにその数は増し、上小平、蛇塚A・B、猫久保、上星谷、下星谷、戸坂、野馬窪和田上、和田上南遺跡等が所在する。これらのうち、蛇塚B遺跡で5棟、戸坂遺跡で4棟、和田上南遺跡で2棟の住居址が検出されている。湯川の対岸ではあるが、上の城遺跡では古墳時代の住居址15棟、平安時代の住居址34棟等が検出され大集落の一部が確認されている。

古文献では、江戸時代中期に吉沢鶴山の著わした四隣譚叢に「小平といふ所は、古城（大井城）の東六町許なり、南北七八町あり、昔城に属したるやしきなりとぞ。今駒くらゐといふ所に、町家の跡とて古井あり、むかし櫓多町此所にありしと云。」と記されているが、今回の調査がなされたこの段丘上が、「小平といふ所は…」に該当すると思われるが、関連があると思われる遺構は、M1号溝状遺構だけであった。段丘上の東側と北側にこの記された遺構が存在するやも知れない。漬石遺跡は、これらの遺跡よりも一段低い段丘上で西方に向けて舌状に伸びる台地に立地し、多くの弥生時代後期の遺物が確認されている。

本遺跡付近より湯川が千曲川に合流する落合にかけての湯川両岸は、いわゆる田切り地形を示しており、段丘上にはほとんど空白がない程度遺跡が密集して存在し、とりわけ市内ではもっとも弥生時代中期の大規模な遺跡（北西久保・寄塚遺跡等）が知られている

（林幸彦）

III 層序



第4図 層序模式図

- 第Ⅰ層 耕作土 土質はやや砂質、北西側は礫が多い。
20cm~30cm。
- 第Ⅱ層 黒褐色土層 粒子細かく粘性の少ない土質。遺物包含層であり、縄文時代から古墳時代にわたる土器を出土している。
- 第Ⅲ層 暗褐色土層 5cm大の軽石円礫をわずかに含みやや粘性のある土質。南域のみあり。
- 第Ⅳ層 茶褐色土層 5cm~10cm大の軽石円礫を含み、粘性に富む。ローム粒子含む。遺構確認面である。
- 第Ⅴ層 黄褐色土層 5cm~10cm大の軽石を含み、ローム粒子・砂粒多量に含む。全体に砂質。
- 第Ⅵ層 明黄褐色土層 ローム粒子多量混入。砂粒は細かい。やや粘性あり。5cm大の軽石含む。
- 第Ⅶ層 灰褐色土層 砂層。2cm大小石含む。
- 第Ⅷ層 赤黄褐色土層 砂粒と5cm~10cm大の礫層。鉄分含む。
- 第Ⅸ層 灰黃褐色土層 黄褐色の砂と灰褐色の砂混合。
- 第Ⅹ層 赤褐色土層 10cm大の礫と砂層。鉄分含む。

下小平遺跡は、佐久市の北東より屈曲しながら南流する湯川の東岸の河岸段丘の2段目にある。現在湯川は約19mの眼下を流下しているが、下小平遺跡の段丘上もかつては川底であり、浅間火山の噴出物の水中堆積層が基盤となっている。したがって地山は、砂質で軽石も円形をなしている。第Ⅳ層茶褐色土層は遺構確認面で、全体に及んでいる。地形は北から南に傾斜し、調査区域南東は低所であったと思われ第Ⅱ・Ⅲ層が厚く堆積している。西側は第Ⅴ層が高く、耕作土直下で現われる地点がある。

(工藤かよ子)

IV 遺構と遺物

1 住居址

1) Y 1号住居址

本住居址は、え～かー15～18グリッド、全体層序第IV層上面において確認された。D 2とM 2の遺構と重複しており両者より後出する。

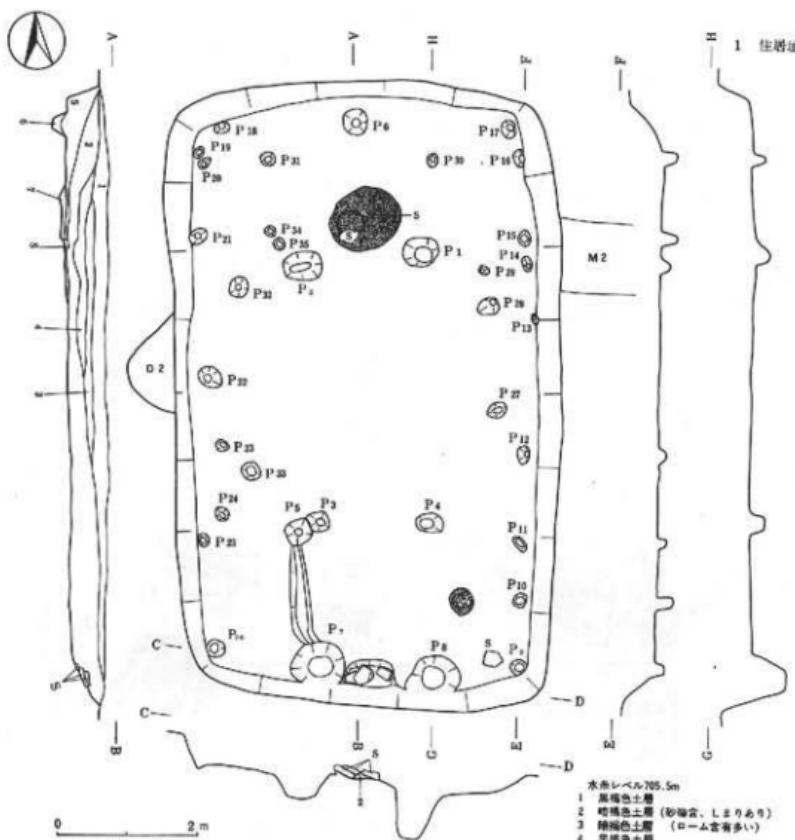
平面プランは南北軸 896cm、東西軸 556cmを測り、短辺と長辺の比は1.61の隅丸長方形である。確認面からの壁高は28cm～46cmで、壁はなだらかに立ち上がる。壁面には崩壊を防ぐためであろうかしまりのある黒褐色土がわずかにみられる。床面は全体層序第V層の砂質黄褐色土がたたきしめられていたが、實際は軟弱であった。

ピットは、35個検出された。主柱穴はP₁～P₄で、東西 180cm、南北 390cmの長方形に配置されている。P₁は南北42cm、東西52cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。P₂～P₄もこれに類似し、浅い柱穴である。P₅～P₂₄は、径20cm前後、深さ12～30cm程の規模で壁際に沿って設けられた壁柱穴である。さらに長軸の両側（東・西側）にはほぼ対称して5個のピットがあり、住居の間仕切りであろうか。P₇・P₈は貯蔵穴と思われ、南壁中央入口の施設両脇に位置している。土器もかなりの量が出土し、P₈底面より粘土塊が検出された。P₇は75cm×64cm、深さ30cm、P₈は80cm×60cm、深さ50cmで双方とも楕円形を呈す。

炉は2基検出された。主炉はP₁とP₂の主柱穴間にやや北に設けられ、100cm×90cm、深さ10cm炉底面は砂地で軟弱ではあるが熱のため赤褐色に変化していた。炉内には2個の炉辺石があり炉のほぼ中央より鉄製品が出土した。土器片が2点みられたが、土器を埋設したのであろうか。副炉は、主柱穴P₁と貯蔵穴P₈の間つまり南東隅に位置し、径40cm、深さ20cmを測る埋甕炉である。この甕形土器は胴部～底部であり、内面を上にして敷き詰められており、上面はススが多量に付着していた。

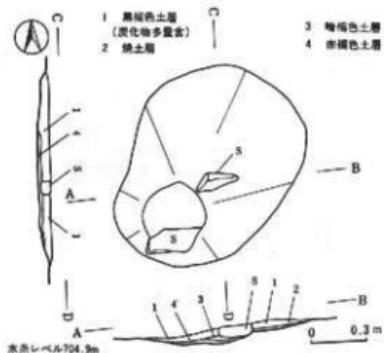
入口施設は南壁中央部に検出された。まず、地山を床面より10cm程残し、その上に鉄平石（輝石安山岩）3個と河床礫1個を黒褐色土を用いてさらに10cm程高くしてある。その結果壁高40cmのほぼ中程に段が設けられていたことになる。鉄平石は南東隅にも1個出土しており、この施設に使用されていたものであろう。

P₃の主柱穴と貯蔵穴P₇とを結んだ形の幅14～30cm、深さ6～8cmの溝があるが、住居址の間仕切りであろうか。

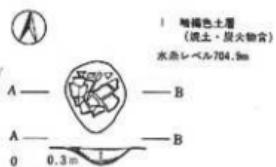


第5図 Y1号住居址実測図

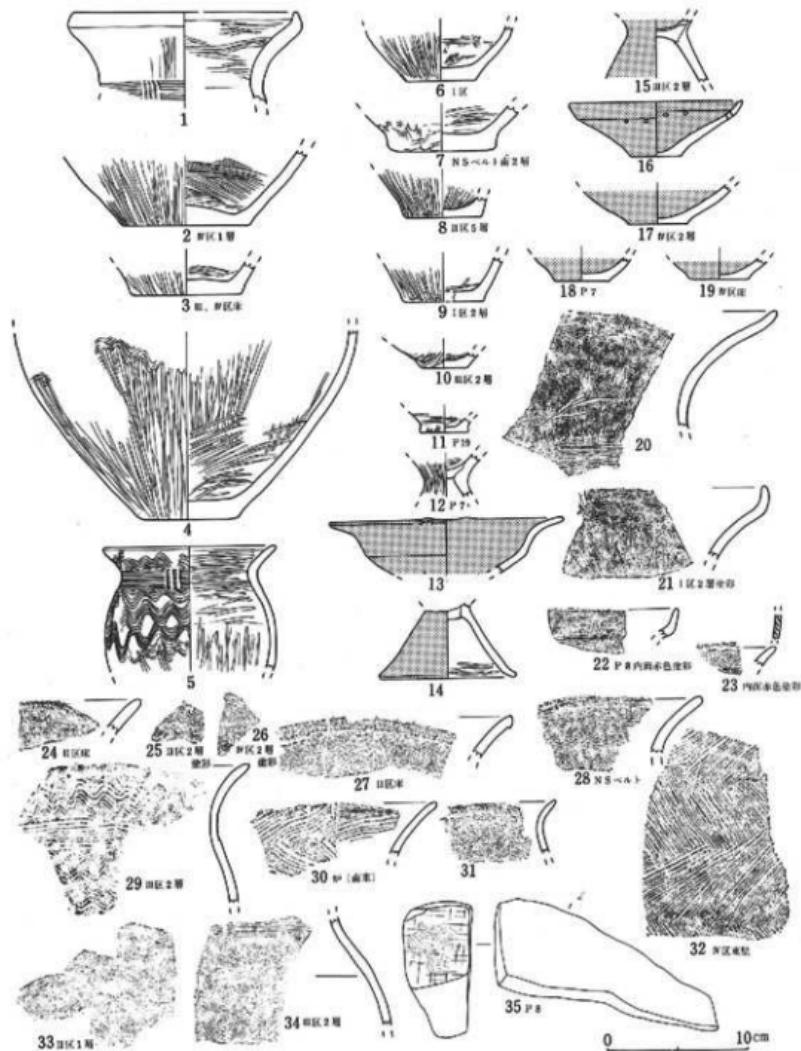
第5図 Y1号住居址実測図



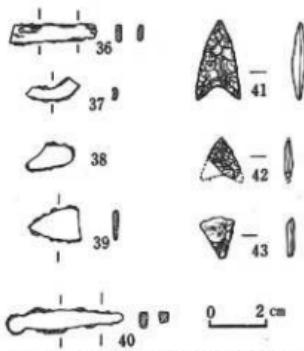
第6図 Y1号住居址炉1実測図



第7図 Y1号住居址炉2実測図



第8図 Y1号住居址出土遺物実測図及び拓影図(その1)



第9図 Y1号住居址出土遺物実測図(その2)

出土遺物は弥生式土器、石器、鉄製品、粘土塊である。遺物の平面分布は南域に多く、殊に主柱穴より壁に向かって多くみられ、第2層より出土している。床面における分布も南側に多い。貯蔵穴より多く出土した。点数は500点ほどである。全体に胎土は緻密で調整も丁寧である。詳細は第2表に表してある。

器種は壺・甕・台付甕・杯・高杯がある。壺はA(21) B(20) D(1)がみられ、他に天竜川水系にみられる壺円弧文の施文されたもの(25)がある。甕にはA b(27) A c(29) C g(5)があり、文様は波状文及び斜状文がみられるが量的には後者が多い。土器以外では鉄製品5点が出土しており注目される。

第2表 Y1号住居址出土土器一覧表

辨別番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
B-1 壺		16.0 (6.0)	口縁部外輪削り、口縁部は破れた後縫をもつて内側し て直立気味となる。	外面 制御圓弧文(7本? 4面止め、4ヶ所) →邊縫ミガキ 内面 ミガキ	全周削造か? 施毛、一 箇所削造か? 施毛、 N70度旋削
B-4 甕		(13.5) 7.2	底下部はややくらみを持ち、底部に軸窪する。	外面 制上部圓弧文→側下部ミガキ 内面 ミガキ	直立甕、内面圓弧文 施毛、 印(底蓋)
B-5 ハ	小形品	12.5 (10.0)	口部端部をく外輪削り、回唇はゆるやかに差 れる。	外面 口縫部端ナデーロ切削→側上部圓弧文(7本、直面削造)→頭部 圓弧文(8本、3面止め) 内面 ミガキ	褐色、外輪面にスヌ材 施毛、 直面削造
B-13 高杯		17.0 (14.0)	中形品、底下部はやや内傾して外輪、中柱に側をもつて大きく外輪削りして削く。口縫部に三角形の突起をも つて	外表面 色地黒彩ミガキ	1区上層
B-14 ハ		(5.3) 9.8	詳細のみ、同じ直面削造の外輪削りで開き、底部はやや外 輪削成となる。	外表面 色地黒彩ミガキ 内面 ナゲ	P.
B-16 盆		(12.5) 3.9 (3.7)	口沿下部はやや外輪削成に外傾し、口沿上部で側をも つて直立気味となる。時に2箇所づつ春化。	外表面 色地黒彩ミガキ	P.

2-3は正方形土器、6-11は直角土器、12-15は圓形土器、16-17は扇形土器

本住居址から、鉄平石等を用いて構築された当地方で初見の明らかな入口施設が検出された。さらに例の少ない整然と配置された壁柱穴、貯蔵穴等の施設を有しており、住居構造を復元する上で貴重な資料といえる。出土土器は、壺D類の内傾する口縁部や肩部に壺円弧文が施されるものがあり、天竜川水系の後期の様相がみられる。(羽毛田伸博、森泉定勝、大井今朝太)

2) Y2号住居址

本住居址は、グリットお・か・き-12~13に位置し、全体層序IV層上面において確認された。弥生時代住居址5棟の内最南端にあり、最大規模を示す。

平面プランは、南北軸 942cm、東西軸 582cm(南壁は北壁より50cm程短かい)の南北に長い隅丸長方形を呈し、床面積(ピット等も含めてだが) 48.5m²、約30畳にあたる。主軸方向はN-5°

-Wである。

壁残高は30cm~40cmを測り、覆土は4層より構成される。第1層は、黒褐色土層を基調とし粒子細かく粘性のない層で、全体層序II層である。第2層は暗褐色土層、黄褐色の砂質ローム粒子1~3mm大まれに5cm大のバミスを含み、炭化物粒子・小炭化材が混入。第3層は暗黃褐色土層で、バミスや砂礫・ローム粒子を含む砂礫層。第4層暗褐色土層。第5層は床面直上にみられるもの。壁は全体に垂直に近く立ちあがるが、構築土層が砂質なため部分的に傾斜をもつところもある。床面は黄褐色土層全体層序V層を全般によく踏み固めて堅硬な状態であり、殊に中央部はしっかりとしており、全体にはほぼ平坦である。南壁中央下のP₁とP₂の間はやや高く、また壁は階段状になり入口施設と考えられる。

また、住居址の北東と北西に一段高い面が設けられ、いわゆる『ベッド状遺構』が検出された。北西のベッド状遺構をベッド1、北東のうち南にあるものをベッド2、北東隅にあるものをベッド3とする。

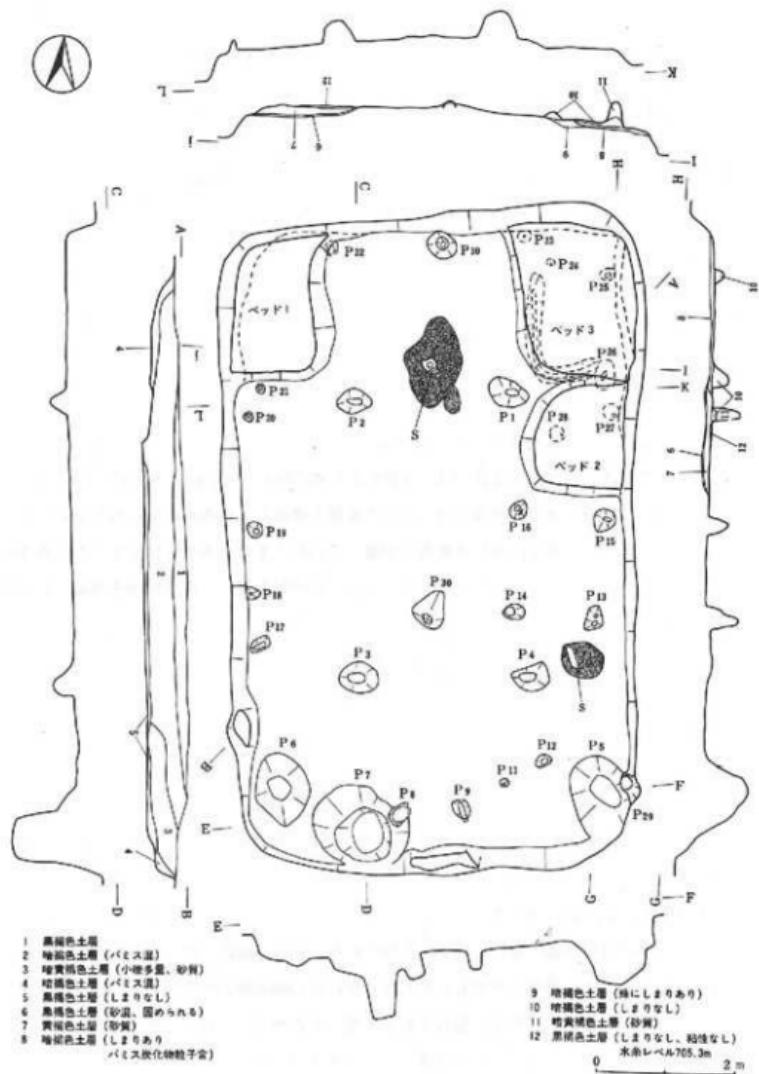
ベッド1は、南北200cm、東西148cm、床面より16cm~20cm程高くなっている。踏み固められた床面に黄褐色砂質ロームを敷き、上面を黒褐色土で覆って固めている。ベッドの面積は約2m²。ベッド2は北側でベッド3をわずかに覆っている。南北175cm、東西150cm、床比高9cm~15cm、ベッド上面積1.8m²を測り、構造はベッド1と同様である。除去後柱穴2個が検出された。ベッド3は、南北230cm、東西170cm、床比高6~10cmともっとも低い。暗褐色土が固められており、やはりベッド下も踏み固められている。ベッド除去後、ベッドの南西側に鉛形の溝状遺構とピット4個を検出した。ベッド上面面積は3.36m²である。形状はいずれも長方形に近いものである。

ピット総数は、ベッド状遺構下を含めて30個である。

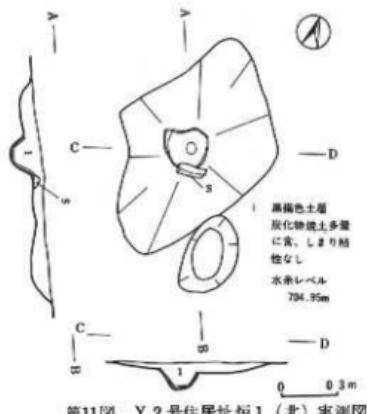
主柱穴は、P₁~P₄、南北間400cm、東西間240cmの長方形に配されている。P₁は楕円形で東西60cm、南北40cm、深さ40cmである。他の主柱穴も略同規模であり、覆土上面に黒褐色土その下に黄褐色土層にわずかに黑色土を含む暗黃褐色土層があり、いずれも長径20cm大の河床礫が2~3個埋め込まれていた。

貯蔵穴と思われるP₅・P₆・P₇は南壁側にある。P₅は南東隅にあり、長径120cm、短径80cmのやや楕円形を呈し、P₆の壁柱穴が東に切り合っている。深さは65cmで黒褐色土が流れ込み、底部近くより土製鉢車が出土している。P₇は南西隅にあり、長径120cm、短径80cmの不整楕円形で、深さ84cmである。下層には暗黃褐色の砂礫層があり、上層は黒褐色土層であった。P₈は円形で、直径140cm、深さ90cmである。上面は一部張り床の状態となって、床面よりやや下がり、暗褐色土層が固められ、その下に黒褐色土層、下層は暗褐色土層と黄褐色土層が交互に2回みられた。ピットの使用方法について貴重な資料といえる。

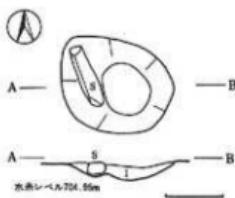
P₉・P₁₀は入口の柱穴と思われ、炉の北、北壁中央に配されたP₁₁と対になっている。P₉は長径36



第10図 Y2号住居址実測図



第11図 Y2号住居址炉1 (北) 実測図



第12図 Y2号住居址炉2 (南東) 実測図

cm、深さ36cm。P₉は長径34cm、深さ34cmであり、やや北に傾斜している。P₁₀は径40cm、深さ25cmを計測する。P₁₁～P₁₆は、住居址東側中央に南北150cm、東西120cmの長方形状に配置されている。P₁₇～P₂₁・P₂₂・P₂₃は壁柱穴と思われる。ベッド状遺構下のP₂₄は長径44cm深さ24cmを測り、溝と連結している。

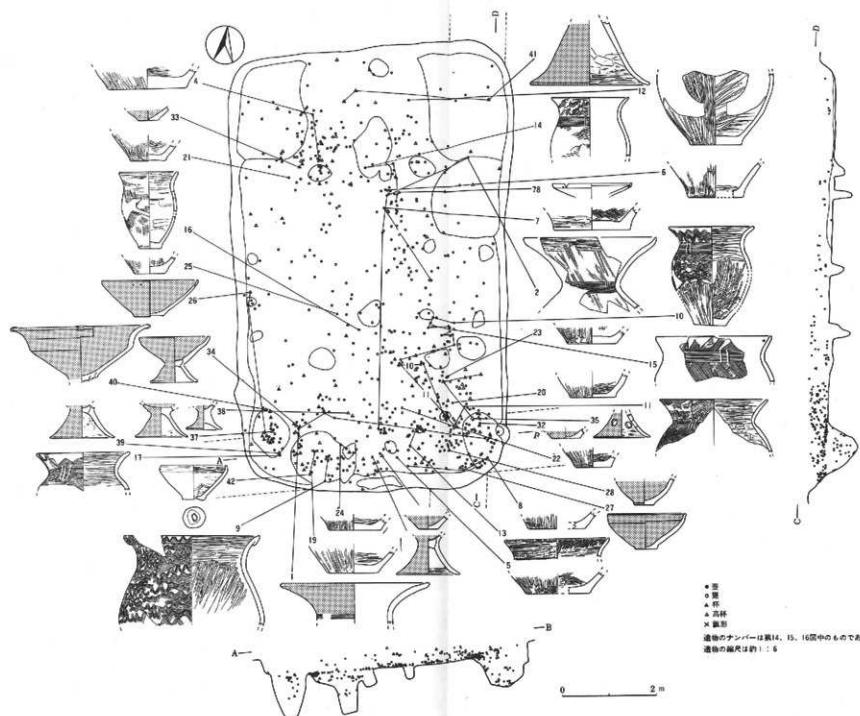
炉は2ヶ所で検出され、炉1はP₁とP₂の中央より北に位置し、南北123cm東西85cmの不整橢円形を呈し、深さは17cmを測る。中央に14-3の壺底部を埋設しその南端に炉辺石を置いたものである。炭化粒子・焼土を多量に含む黒褐色土が覆っていた。また、南東には炉2があり該期には珍しい位置に設置されている。長径60cm、短径50cmの橢円形を呈し、深さ10cmを測る。炉辺石を西に置き炉内には炭化粒子を含む黒褐色土があった。

出土遺物は、弥生式土器、土製紡錘車、石鐵、鐵鐵、凹石、砾石、繩文式土器片がある。

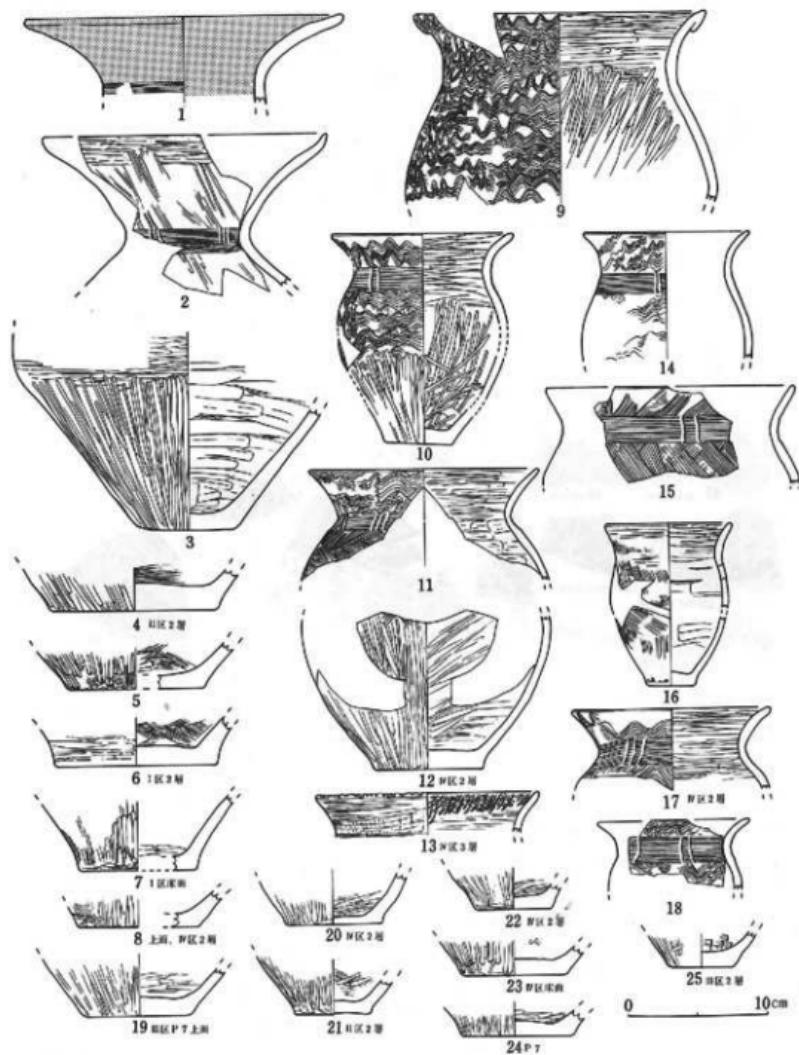
土器は、壺・甕・壺・高環・瓶の器種が、他に図示不可能な台付甕の脚部が出土している。遺物の出土量は多い。遺物の平面的分布は、III・IV区に集中しており、ベッド状遺構上には少なく、中央のP₁・P₂付近に流されたとみえる。垂直分布は第2層中も多いが、床面近くに最も多い。第2層中の遺物と床面の遺物の接合がみられ、柱穴内と第2層中の接合もある。

壺はA～C類がありA類がもっとも多い。甕はA b・A c・B d・C f・B h・C h類とバラエティにとんでいるが、折り返し口縁が多くみられ、文様は波状文と斜状文がある。さらに、該期には特異な14-13、15-68の頸部より上に文様をもたずたんにヨコナデされただけのものもみられ、この2点には口唇部に甕により刻目が施される。高環は他の住居址に比して非常に多くの個体数が出土し、図示しただけでも8点あり、さらに10個体余のものがある。15-34は完形品で器高は7cmと極めて小形である。他にも小形が大部分を占める。これらはIII区より集中して出土した。杯も量が多く小形がほとんどで口径に比べて底径が小さい。片口も2点みられる。

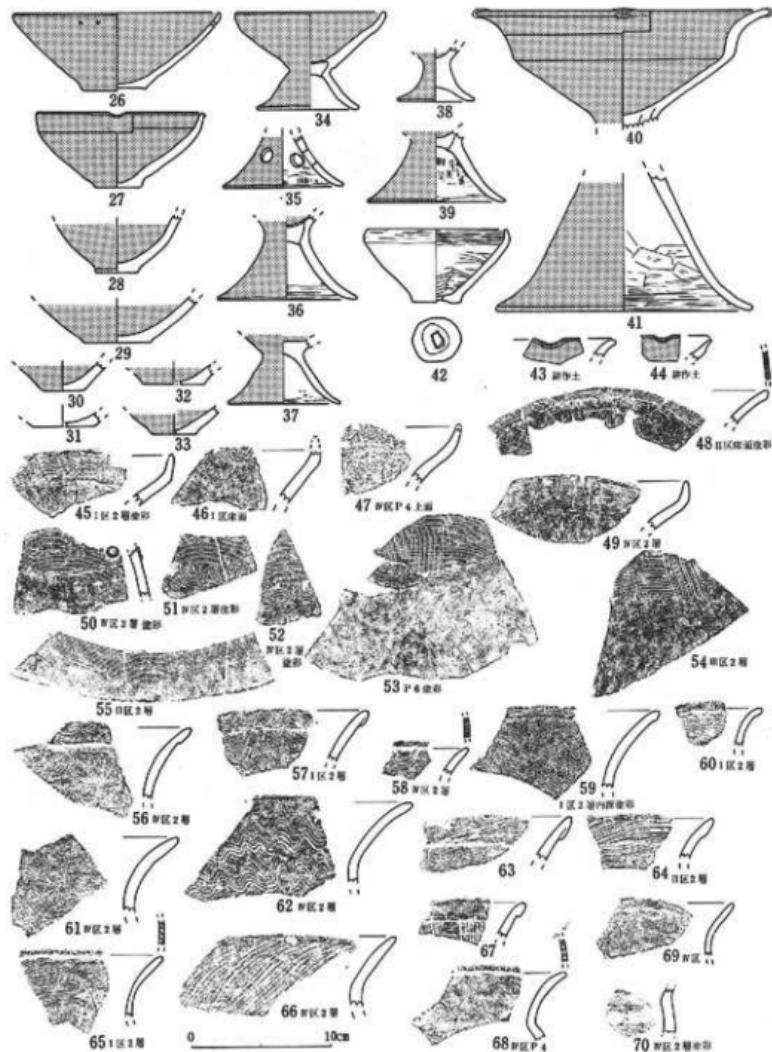
土器以外では、当方では数少ない鉄鐵が1点、径5.5cmの円形を呈し、中心に径0.6cmの一孔をもつ土製紡錘車も出土している。



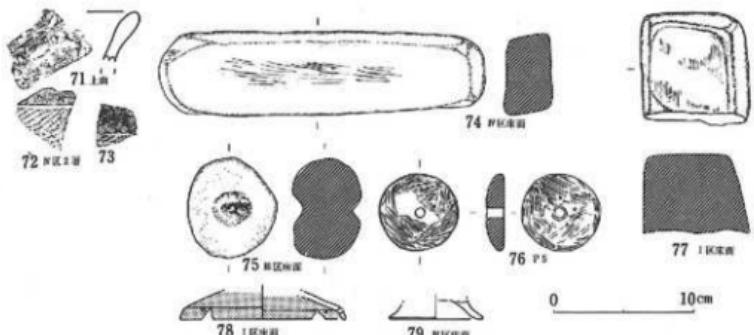
第13図 Y2号住居址遺物分布図



第14図 Y2号住居址出土遺物実測図(その1)



第15図 Y2号住居址出土遺物実測図及び拓影図(その2)



第16図 Y2号住居址出土遺物実測図及び拓影図(その3)(80.81は1:2)

第3表 Y2号住居址出土土器一覧表

序号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
34-1	盃	(23.0) <5.5	口沿部つよく外傾外反し、上縁水平に近くなる。	外面 口沿部内外面赤色を彰ミガキ 滑擦剥落文(1本)*	■区段 P.
34-2	盃	(25.9) (31.4)	口沿部は外傾外反し、口縁部で内傾し直立到達となる。	外面 滑擦剥落痕文+滑擦文(10本、3連止め)、口沿部カキ+剥落ミガキ(複数) 内面 ミガキ(複数)	■区段 P. II・III区段
34-3	盃	(34.3) 7.3	杯下部への変遷点はなく明確な能をなさず、やや屈曲で、外反外傾時に能能に帶まる。	外面 剥離ミガキ(複数) 四下路ミガキ(複数) 直部ミガキ 内面 ハテナナ	褐色 S.I.
34-4	盃	(39.0) (33.0)	口沿部比較的鋭か+外傾外反し、口縁部軽り屈曲。裏 小切口にかけて底付能をもつ。	外面 ハテナナデ→ロ→銅上端底反(8本、多復始終) 内面 口沿部ミガキ(複数) 制削ミガキ(複数)	茎褐色。内外面ススキ P.
34-10	小鉢皿	13.1 15.5 16.5	口沿部は比較的鋭か+外傾外反し。銅上端で僅り 底付能もしくは能能に底付能をもつ。最大径約13cm。	外側 口沿部鋭く(複数) 中央中凹下端底反(9本)→滑擦剥落文(1本)→滑擦剥落文(1本) 内側 2連止め+滑擦文(複数)、口沿部ミガキ(複数)、底付能(複数)、内面ミガキ(複数)	茎褐色。内外面ススキ P.
34-11	小鉢皿	(16.0) (8.0)	口沿部は漸進的に外傾し、底付能で握る。殘留跡が強引 に移行する。	外側 銅上端底反文(1本、複数)→滑擦剥落文(8本)、滑擦文(7→8 本)、制削ミガキ(複数)、底付能ミガキ(複数)	茎褐色。外表面ススキ 内面ミガキ(複数) P.
34-13	小鉢皿	(15.0) (3.0)	口沿部鋭か+外傾し外反欠缺。口縁部で内傾。	外側 ハテナナデ→ロ→銅上端底反(7本) 内面 ハテナナ+滑擦文	茎褐色。外表面ススキ P.区段 3層
34-14	小鉢皿	(21.8) <9.0	口沿部外傾外反し。制削で擦る。	外側 ロ→銅上端底反文→滑擦剥落文(7本、2連止め) 内面 ミガキ(複数)	赤茶褐色。葉葉落しい I区段・P.
34-15	小鉢皿	28.2 <7.0	口沿部外傾し、口縁部底付能。	外側 ロ→銅上端底反文→滑擦剥落文(10本、2連止め)	褐色 N区段 3層
34-16	小鉢皿	9.1 (31.7) 2.5	口沿部わずかに外傾外反し。銅中柱でわざかに裏付。	外側 口沿部底ナシ。制削ミガキ、底付ミガキ 内面 ミガキ	暗褐色 N区段 2層
34-17	小鉢皿	(24.5) 2.5	口沿部外傾外反し、銅上部折る。	外側 口沿部底ナシ→ロ→銅上端底反文(9本)→滑擦剥落文(1本、 2連止め)、底付ミガキ(複数)	暗褐色 N区段 2層
34-18	小鉢皿	20.9 <5.0	口沿部と外傾外反。	外側 口→銅上端底反文→滑擦剥落文(8本、2連止め)	褐色 N区段 3層
35-26	杯	15.0 5.5 4.5	口沿部漸進的に外傾し、口縁部内傾する。口縁に2枚 寄附される。(他成) 斜擦剥落文を呈す。	外側 茶色底漆ミガキ 内面 ミガキ	■区段 2層・P.
35-27	杯	12.9 5.5 2.5	口沿部漸進的に外傾し、上部で内傾して底付 能付する。底付能合底能を呈す。	外側 茶色底漆ミガキ。底付ヘタケヌリ 内面 茶色底漆ミガキ	N区段 3層
35-34	小鉢皿	11.0 2.6 7.0	小鉢皿。杯下部底付能に内傾し、上部で内傾して底付 能付なる。制削外傾し開き、制削部底付能。	外側 底付能ミガキ 内面 ミガキ	■区段
35-36	杯	(3.2) (2.0) 2.7	制削は全体に片状欠陥に限る。	外側 茶色底漆ミガキ 内面 ミガキ	■・N区段 2層
35-37	杯	(3.5) (2.1) 0.7	制削全体に外傾能に開く。銅中柱に円形スカシ(復 1.1mm) 2連止めあり。	外側 茶色底漆ミガキ 内面 ミガキ	■区段
35-39	小鉢皿	(3.2) 0.2	制削ややふくらみをもって外傾して開き。制削部底付能。	外側 茶色底漆ミガキ 内面 ミガキ	■区段
35-20	杯	(5.0) (10.0)	制削全体に外傾して開き外傾する。	外側 茶色底漆ミガキ 内面 ミガキ	■区段 3層

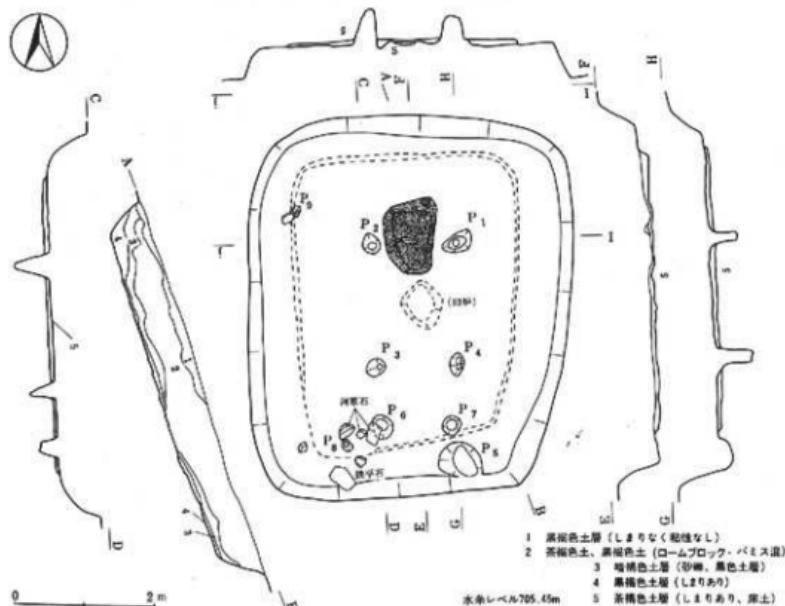
15-40	*	23.4 (8.0)	床下窓痕的孔外側に、中央で枝をもつて大きく外張り出しし、縫部水平に近くなる。口部部三角突起。	内外面 赤色朱彩とヶ牙	P ₄
15-41	*	< 9.2 18.6	輪形は直線的に引き、端部で外反する。	外側 赤色朱彩とヶ牙 内側 ヘラナゲ 縫部樹ナマ	II区床・ベッド上
15-42	残	(10.2) 3.5	裏面小さく台状を呈し、一孔あり(焼成微穿孔)、口部端外側に、口絆修理をもつて内側する。	内外面 ミガキ	II区床・3連

4~8 直形土器 20~25 宽形土器 29~33 扁形土器 43~45 斧口朴刀

本住居址は、本遺跡中最大規模でベット状遺構を持つ。遺物の出土量多く殊に小形の高环が顕著である。また、Y 1号住居址同様天竜川水系の後期にみられる十円弧文が施文された壺片も出土しており注目される。
(工藤かよ子、井上行雄)

3) Y 3号住居址

本住居址はあ～う～9・10グリッドに位置し、全体層序IV層茶褐色土層上面で確認された。平面プランは、南北軸 550cm、東西軸 460cmを測るやや南北に長く北東に張り出して、形がややゆがんだ隅丸長方形を呈す。主軸方向は、N-5°-Wを指す。



第18図 Y 3号住居址実測図



壁高は確認面より42cm～56cmを測り、比較的急に立ちあがる。覆土は4層に分かれており、第1層は黒褐色土層で全体層序第II層黒褐色土層であり、第2層は茶褐色土（ロームブロック・粘性に富む）と黒褐色土がブロック的に混在している。第3層は暗褐色土層で小礫・黒色土・ローム粒子を含み、第4層は黒褐色土層でしまりのある層である。

床面はほぼ平滑で黄褐色土層が踏み固められているが、内側に同プランの第5層茶褐色土層のプランがみられ貼り床されていた。下面からも炉址を検出することができた。

上の床面よりピット9個が検出され、主柱穴はP₁～P₄で、住居址中央に、東西120cm南北170cmの長方形に配される。P₁は40cm×28cmの楕円形、深さ38cm、P₂は30cm×25cm深さ49cm、P₃は28cm×25cm深さ38cm、P₄は34cm×20cm深さ53cmである。

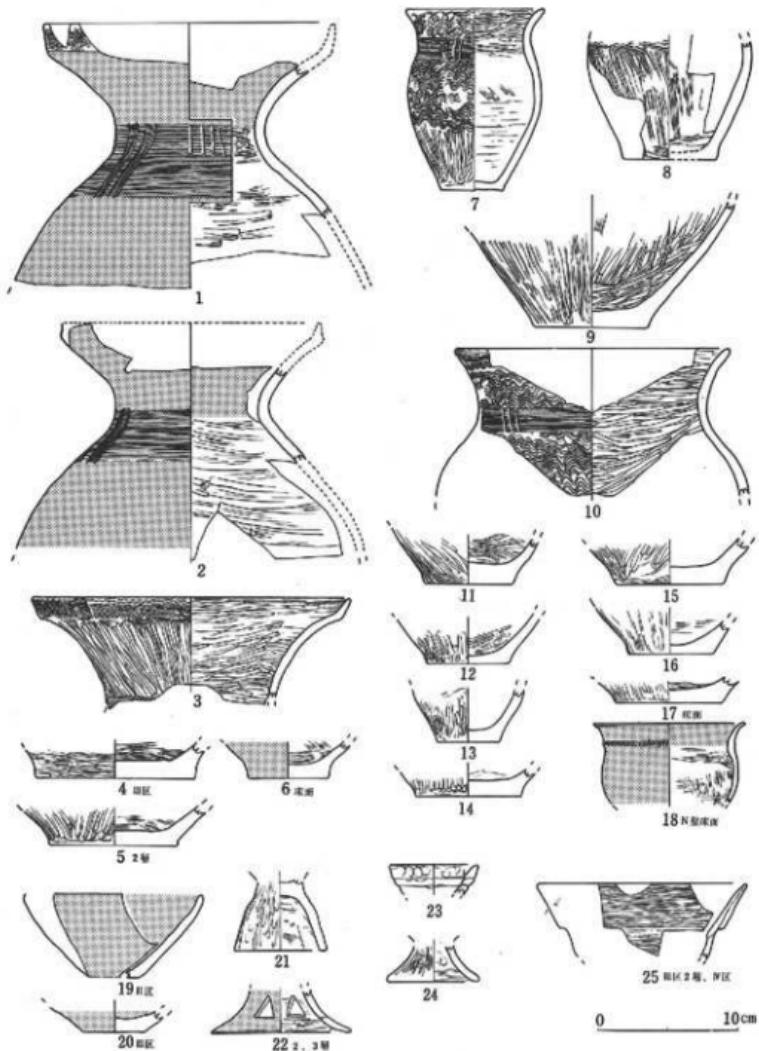
P₅は南東隅近くにあり、径60cmのほぼ円形で深さ24cmを測り、南側壁を切り込んだ形で構築され、完形の小形窓（19-7）と妻の底部が出土し貯蔵穴と思われる。P₆とP₇は入口施設の掘り込みと思われ、径30～35cm、深さ26cmを測る。P₈、P₉は旧プランと一致しており、旧住居址に伴うものと思う。P₁～P₄内には黄褐色土層に近い覆土がみられ黒色土を含んでいる。P₅は上層に暗褐色土層、下層に茶褐色土層が堆積していた。

炉址はP₁とP₂の中間に位置しやや北よりである。南北100cm×東西74cmで北側が大きい長方形で、深さは8cmである。中央に炉辺石を置き、炉辺石より北側は浅い鑄鉢様に凹凸に窪んでおり、火床面は固められ、焼けて赤褐色を呈し、炭化物粒子を含む黒色土層とその下に焼土層がみられた。炉辺石南側は、炭化物粒子を含む黒色土層で面は軟弱である。

南壁側床よりやや上面に北傾斜する鉄平石、河原石が計4個があり、南壁中央にあった入口施設が崩壊してやや西側に押し流されたのではと推察される。

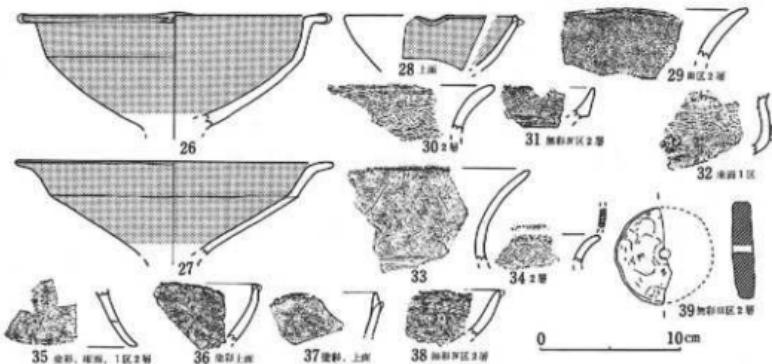
本住居址内の床面にある下面のプランは、南北420cm、東西320cmを測り、北壁が60cm程長い不整の隅丸長方形を呈し、新床面より1～20cm程度がっている。旧床面も固められているが、堅穢という程ではない。炉址はP₁～P₄の中央に位置し、70cm×60cm程の不整円形で深さ6cmを測り、火床面は固く焼けていた。炭化物を少し含む黒褐色土がみられた。柱穴等は、新床面で検出されたものと同位置であるため、小形の旧プランに伴うものかどうか判明できない。P₈、P₉等は内側のプランに沿っている。小形の住居址プランを大形の現プランに拡張したのではないかと思う。

遺物は上面からも多量に土器破片が出土しており、土製紡錘車片、手捏片等が2層上面から、



第19図 Y3号住居址出土遺物実測図

（その1）



第20図 Y3号住居址出土遺物実測図及び撮影図（1：4）（その2）

第4表 Y3号住居址出土土器一覧表

地図番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
19-1	壺	(22.0) (18.7)	口部外気流に外傾し口縁部で腰をもつ内腹気流に直定。腹部やくら直定。腹部の影響に伴う、最大底径倍	外側 滑腹直火文(12年、4歳止)、2ヶ月→口縁直火文(12年、3歳)→横腹直火文(2年、3歳)→口縁直火文(2年、3歳止)、口縫直火文→口縫、口縫部赤色半引出(?)、内腹口縫部赤色直火文、腰部下引出。	Ⅰ・Ⅱ区7 Ⅰ・Ⅱ区7
19-2	壺	18.5 (17.1)	口縫部外傾反し、口縫上部で腰をもつて直火文に直定する。頂部膨張。	外側 滑腹直火文(9年、3歳)→横腹直火文(9年、2歳)、4ヶ月後→口縫、口縫部赤色半引出(?)、内腹口縫部赤色直火文、腰部下引出。	Ⅳ内面ススキ面 Ⅳ P2
19-3	壺	13.0 (8.1)	口縫部外傾反し、口縫部に腰をもつ直火文に直定気流に直定する。頂部膨張。	外側 口縫直火文、口縫部膨張直火文→口縫部下引出、内腹 1ヶ月	褐色・黒色 2面
19-4	壺	<2.4) 5.5	瓶形右底に突出。	外側 滑腹直火文直火文(?)、瓶部下引出 内腹 ハケナ子	Ⅰ区 2号
19-7	壺	10.9 (12.7)	小形品。口縫部外傾反し、瓶上部で直火文、參青中位から底部にかけて膨張する。最大底は口縫、圓弧。	外側 ローレー式直火文(11年、3歳止)→横腹直火文(11年、3歳止)、4ヶ月後→口縫部下引出(?)、内腹 1ヶ月(?)	褐色 P2
19-10	壺	(22.4) (30.5)	口縫部外傾反し、瓶部膨張。	外側 口縫部直火文→口縫部直火文→横腹直火文(13年、3歳止内) 内腹 1ヶ月(?)	粘土
19-18	小罐	(11.0) (5.6)	口縫部やくら直火文、直火文でわざににくひ、瓶内に直火文でわざに直定する。	外側 直火文直火文(?)、瓶部へラ付火文 内腹 口縫部直火文(?)、瓶部直火文	Ⅳ内面直火文 Ⅳ外側直火文
19-19	瓶	(12.7) 6.0 3.5	口縫部外傾し、口縫部内側半引出する。	内外面 褐色半引出(?)、瓶部斜傾。	Ⅳ区2号
19-21	壺	(1.1) (7.0)	瓶は内側して外傾し、瓶部は膨張してある。	外側 1ヶ月(?)、内腹 ナナ	茶褐色 1角
19-22	壺	(2.0) (10.0)	瓶は全体に外傾して直火文。三角スキシヤ面にあく。	外側 褐色半引出(?) 内腹 1ヶ月(?)、瓶部斜傾	Ⅳ区3号
19-23	壺	(4.3) (2.1)	小内側欠残に外傾。	内外面に直火文直定。瓶部直火文。	黄褐色 上部
19-24	骨器	(2.6) (6.7)	堅かい骨。全体に外傾。	外側 ハケ 内腹 ナナ	茶褐色 Ⅳ区
19-25	壺	(3.1) (5.5)	口縫部直火文でわざなし、やや外反直火文に外傾し、底部は丸丸を呈する。ものと想われる。	内外面 1ヶ月	褐色 Ⅳ・Ⅳ区2号
19-26	壺	(22.0) (2.5)	瓶下部内側直火文に直火文し、中位で腰をもつて直火文し、口縫部は内側に腰をもつて外水に水平に折れる。口縫部直火文的外傾し、中位上部で腰をもち、大さく外縫部外傾する。頂部は水平に近い。	内外面 褐色直火文(?)	2号
19-27	壺	(22.8) (9.8)	瓶下部直火文的に外傾し、中位上部で腰をもち、大さく外縫部外傾する。頂部は水平に近い。	内外面 褐色直火文(?)	褐色 Ⅳ

4・5直火土器 6・9・11・17直火土器 30昇形土器

2層中位からは壺形土器口辺等が出土し、III・IV区に集中している。出土遺物は、弥生式土器、土製紡錘車である。壺・甕・台付甕・坏・高坏・手担の器種がある。

壺で特徴的なのは、有段口縁をもつ一群A類であろう。口縁形態及び有段部に波状文が施される要素は、安源寺Ⅲ類に類似するものの、強く張る肩部や短頸である点が異っている。また、19-2の段部はくずれた「S」の字状を呈し特異なものである。甕にはA・B・Cがあり施文されているのは、すべて波状文である。口縁部が折り返されるものは皆無である。19-8は小形甕ともいえる器形で、外面と内面の口辺部に薄く塗彩されており、頸部にごく僅かな凸帯が一周し、その部分に篦状工具により刺突されている。19-25は折り返された口縁が丸味をおびながら底部へむかう器形で、内外面にミガキが丁寧に施され光沢がある。この2点は千曲川水系の後期土器の中にはみられないもので注目される。

本住居址は、新旧2面の生活面が認められたが、共用している柱穴等から住居の拡張を考えられよう。住居形態は他の4棟に比して小形であり、出土遺物も前述したように箱清水式にはみられない特異な土器の存在がみられその出自が問題となろう。

(林 幸彦、三石延雄、黒岩忠男)

4) Y4号住居址

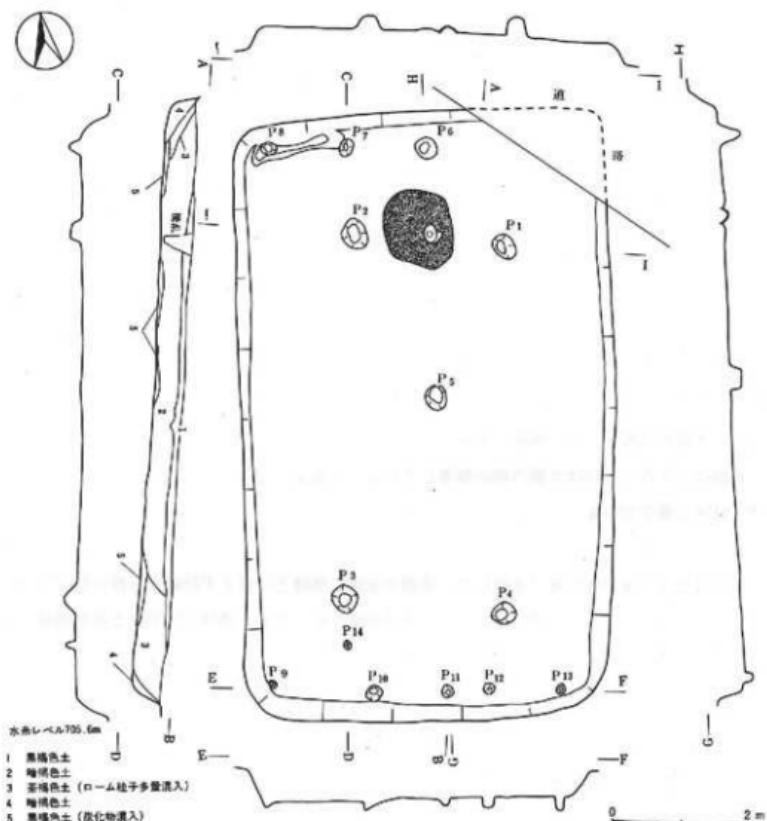
本住居址は、グリッドら・あーうー4-6に位置し、全体層序IV層上面で確認された。北東コーナーは、発掘区域外で調査できなかった。

平面プランは、南北軸で873cm、東西軸537cmを測る隅丸長方形である。主軸方向は、N-5°-Eを指す。

確認面からの壁高は、40cm~50cmを測り、比較的垂直に近く立ちあがる。覆土は5層よりなり、第1層は黒褐色土層で全体層序のII層である。第2層暗褐色土層は、ローム粒子含むしまりのない層であり、住居址中央部の床を覆う。第3層は茶褐色土を呈し多くのローム粒子、バミスを含むややしまり粘性のある層である。壁際には第4層暗褐色土。第5層は床直上にみられる薄い層で、炭化物粒子、砂粒を含みしまりのあまりない層である。床面は黄褐色土層が踏み固められていたが、西辺はやや軟弱であった。

ピットは計14個が検出された。 $P_1 \sim P_4$ は主柱穴と思われ、 P_1 は36cm×28cm、深さ35cm。 P_2 は40cm×32cm、深さ28cm、 P_3 径46cmの円形深さ22cm、 P_4 は36×38cm深さ28cmの円形に近いもので、柱穴間距離東西220cm、南北525cmの長方形に配される。 P_5 はその対角線の交点にあり、長径37cmの楕円形で、深さは16cmと浅い。 P_6 は炉の北に配され、径30cmの円形で深さ28cmを測る。

$P_7 \sim P_{13}$ は壁柱穴と思われる。径12~24cmの円形を呈し、深さ8cm~20cmである。検出位置が南壁に一列に並び、北壁の西では周溝と重っており、住居空間の使用法が注目される。 P_{14} は補助

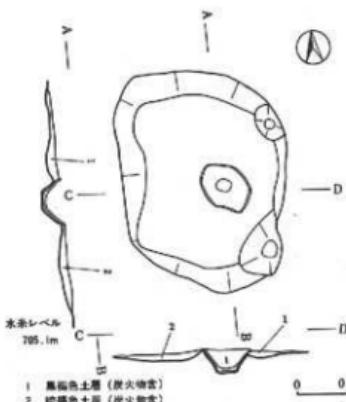


第21図 Y-4号住居址実測図

柱穴か。柱穴覆土は、全体に茶褐色土層を含み、ローム粒子砂礫を含むしまりのないものである。

炉址はP₁とP₂の間にあり、不整円形を呈し、北東・南東に小ピットがある。径110cm、深さ20cmを測る。炉址中央よりやや東によって窓形土器胴～底部(23-5)が埋設されていた。土器下は黄褐色土層も熱変化を受け赤褐色を呈していた。炉覆土は、炭化物粒子を多量に含む黒褐色土層と含有量の少ない暗褐色土層である。

出土遺物は、弥生式土器、縄文式土器片、石鏃、鐵鏃がある。土器は床面に伴うものが多く、復元もかなりできた。破片量は少ない。



第22図 Y 4号住居址炉実測図

大形のA類の壺部と小形の脚部がある。

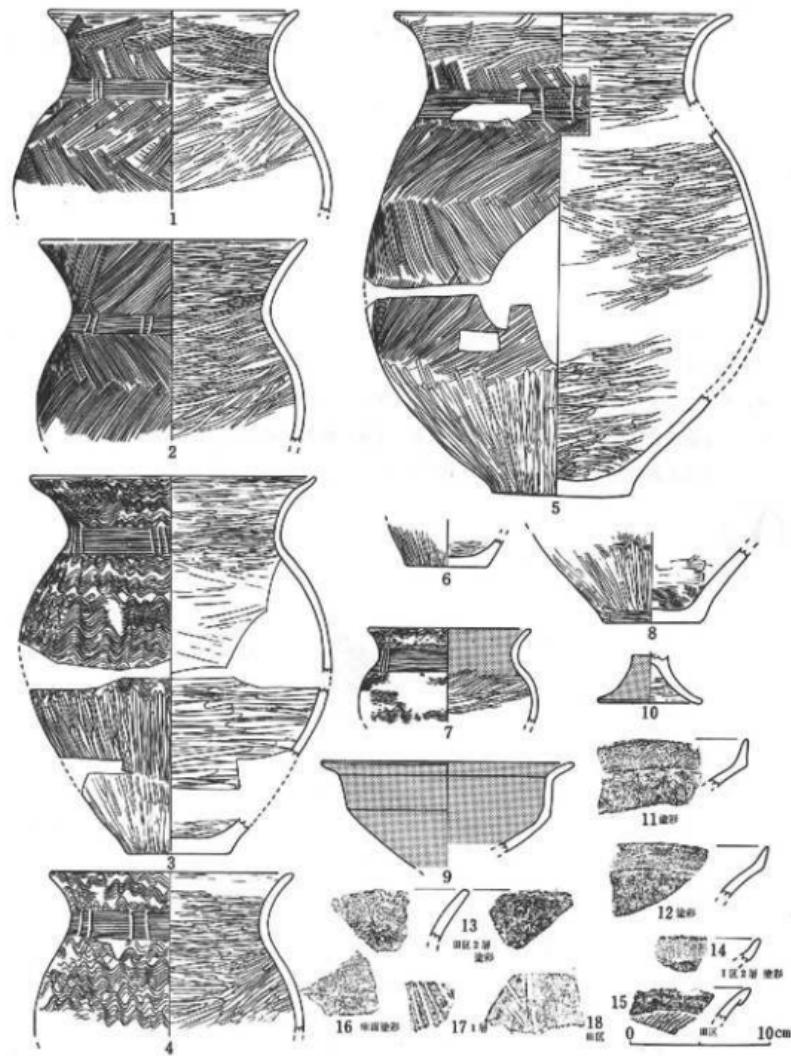
鉄錠は2点あり、19は2個の鐵が接着している。床面より10cm程上面でみられた。石錠は、2点、II区2層中である。

本住居址は、他の住居址に比較して、床面が全体に堅緻とは言えず貯藏穴も検出されていない。出土遺物の變形土器だけが殊に多く、Y 3号住居址でのべたが、高环片はY 3と接合関係を持つている。

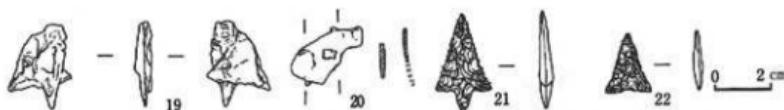
(三石延雄・工藤かよ子)

第5表 Y 4号住居址出土土器一覧表

機器番号	器種	法量	器 形 の 特 殊	測 定	備 考
23-1	壺	18.5 (14.5)	口沿下部、側面で直立し、口邊部外縁に強く外弧する。 底盤は側く張り且大底をもつ。	外周 口沿下部外縁直立(1.5cm、3段、左→右。左斜弓)→側面外縁 底盤は側く張り且大底をもつ。	赤褐色、外周ヌス付 且区区
23-2	壺	19.2 (14.5)	口沿下部や外板外縁に外弧し、頂上部は輪廓形に丸味 をもて来る。口沿と側面大底が同様を示す。	外周 口沿下部外縁直立(1.5cm、3段、左→右。左斜弓)→側面外 縁上部は輪廓形に丸味、側面は大底をもつ。	赤褐色、外周ヌス付 且区区
23-3	壺	20.5 (17.3)	口沿下部直、比較的強く外弧し、口沿部で内凹する。 頂上部は輪廓形に丸味、側面は大底をもつ。	外周 口沿下部外縁直立(手作不規則)→側面外縁直立(12cm、3段止め、 6cm所、内側 1カキ(側))	赤褐色、外周ヌス付 且区区
23-4	壺	17.6 (15.7)	口底盤から側く張りし、頂上部は輪廓形に張り、側 面は側大底をもつ。	外周 口沿下部外縁直立(12cm、2段止め、ミッカ)左 下部 1カキ 内側 1カキ(側)	赤色、外周ヌス付 且区区
23-5	壺	24.2 (22.2) 9.8	口沿部直かく上端で側く外弧し、頂上部下にかけてゆ るやかに輪る。頂下部も丸味を有し、底入縁は側面。	外周 口沿下部外縁直立(12cm、3段止め、4カ段) 内底 口沿部外縁直立(1カキ、側底1カキ)	赤褐色、褐色、 且下部がに側面。 且区区
23-7	壺	11.0 (7.7)	口沿部直かく外弧外反し、側上部で輪廓形に張る。	外周 口沿下部外縁直立(5cm、3段、直底)→側面外縁直立(15 cm 2段止めの4カ所) 一側底部1カキ 底部1カキ 内面側下部のみ	赤褐色、外周ヌス 且区区
23-9	高环	28.0 (7.7)	当下部は側大底に外弧し、中段で底をもって直立し、 口縁部外方に強い棱をなして併れる。	内外面 赤褐色直立(1.5cm)	且区上層
23-10	壺	23.4 (7.6)	脚は小形で全体に再発して聞く。	外周 赤褐色 内面 1カキ 沈痕ナナ	且区 2層



第23図 Y4号住居址出土遺物実測図及び拓影図（1：4）〈その1〉



第24図 Y4号住居址出土遺物実測図(その2)

5) Y5号住居址

本住居址は、あ～うー100・1グリッドに位置し、全体層序V層上面で確認された。東側半分は調査区域外で調査できなかった。

平面プランは、南北 592cm、東西は推定で 440cm を測る隅丸長方形を呈し、主軸方向は、N-22°-Eを指す。

壁残高は、14cm～22cmでなだらかに立ちあがっている。覆土は2層よりなり、図中第3層は黒褐色土層でしまり粘性に富んでいた。壁際は崩壊層と思われる砂質の第4層暗黄褐色土層がみられた。床面は黄褐色土層が固められていたが、全体に軟弱であるが、中央部はそれでもやや堅い。

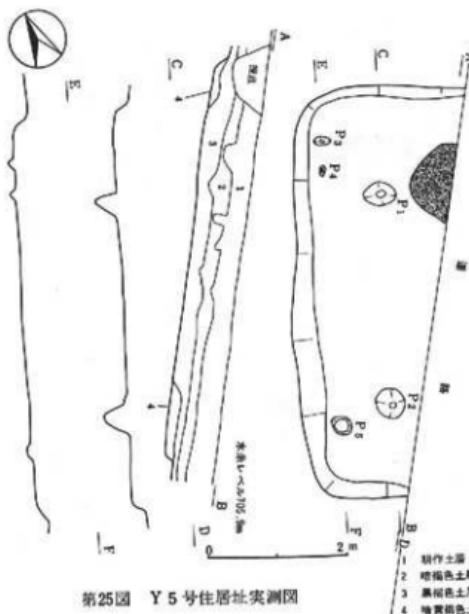
ピットは5個確認された。P₁・P₂は主柱穴と思われ、P₁は長径48cm、短径34cm、深さ30cmの楕円

形、P₂は径42cm、深さ34cmの円形である。P₃～P₅は壁側にあり、いずれも浅いものである。

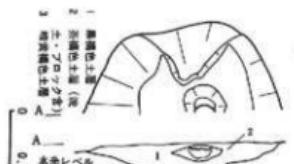
炉はP₁の東に位置し、半分は調査区域外であった。径 105cm、深さ22cmの円形を呈すものと思われる。炉内覆土の黒褐色土層内に、茶褐色土を入れて固め、壺形土器底部に埋設されていた。

本住居址よりの出土遺物は、壺形土器・壺形土器・鐵錠である。遺物の出土量は住居址半域のみということもあるが少ない。

壺形土器は、壺Aに分類され、口径36cmを測る大型品である。有段部には波状文、口唇部には刻目が施こされ、ミガキのみで無彩で



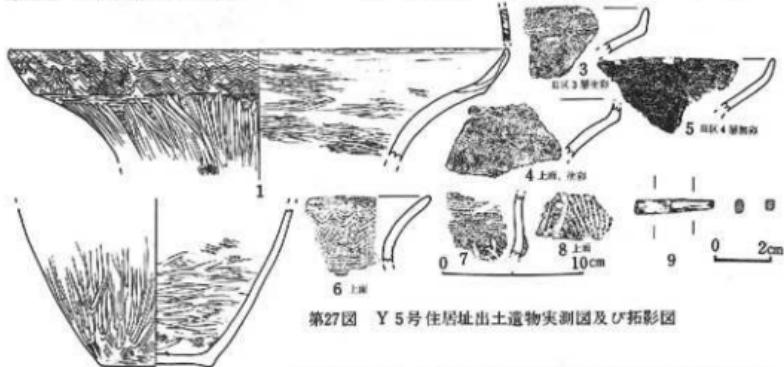
第25図 Y5号住居址実測図



第26図 Y-5号住居址炉実測図

ある。4の破片ではあるがA類の壺で文様の施こされないもの、また壺B類の口縁部が内側する5も出土している。拓本に示した3・4はいずれも赤色塗彩が施される。

壺形土器は炉底に使用された底径8cmを測り、外面ミガキ内面ハケ目を残して粗雑にミガキが施さ



第27図 Y-5号住居址出土遺物実測図及び拓影図

れたものである。小形の壺形土器片には円形貼付文が貼付される。

本住居址は、方形に近いプランを呈し、炉の構造は他の住居址と異なり地山に直接埋設せず、他の土で固めてから置いている。出土した壺形土器は有段口縁のA類に属し、無彩であり、其伴して塗彩のA類・B類がみられることは注目される。

(林 幸彦、森泉定勝)

6) H1号住居址

本住居址は、グリッドせられた7・8に位置し、全体層序IV層において確認された。本調査における唯一の古墳時代の住居址である。平面プランは、南北480cm、東西500cmでカマドの煙道部がやや突出しているが略隅丸方形である。主軸方位はN-25°Wを指している。

壁残高は55cmを測り、壁は傾斜をもって立ちあがる。覆土は2層で構成され、第1層黒褐色を呈し、粒子の細かい粘性の弱い土質で、小石を含んでいる。第2層黒茶褐色土層は床面を覆い、炭化材が出土している。床面は地山である黄褐色土層であるが、炭化材が床面に食い込んでいる状態で検出され堅硬な面は確認されなかった。

柱穴は4個あり、柱穴間距離約2.2mの方形に配される。P₁は直径45cm深さ60cmの円形、P₂は長径30cm深さ84cmの楕円形、P₃は長径45cm深さ45cmの楕円形、P₄は長径50cm深さ55cmの楕円

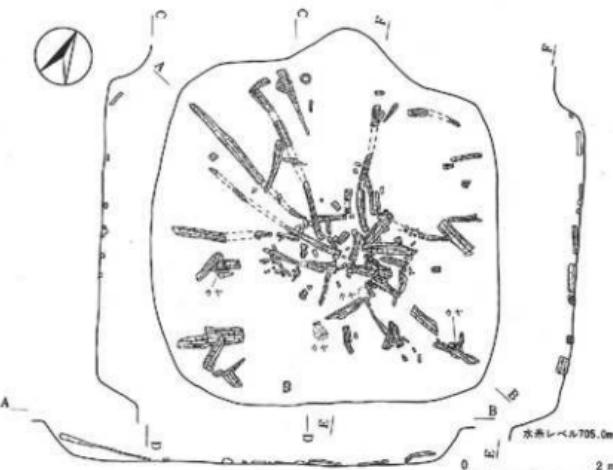
形である。柱穴覆土は、黄褐色土に微量の炭化物粒子、黒色土が混入したものである。

カマドは、北壁中央に位置し、155cm×90cmの範囲に明黄褐色粘土を用いて構築されている。全体に崩落している。火床・煙道にも粘土が貼ってあり、煙道は舟先状に住居址外へ掘り込まれている。

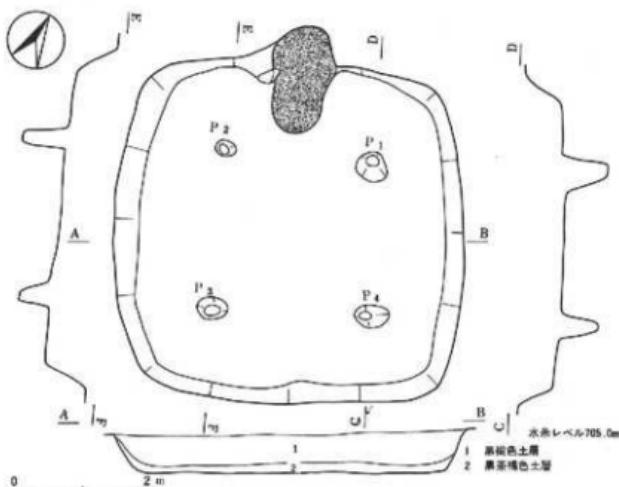
西側の石は、袖部の補強材と思われる。

本住居址は火に遭っており床面上にあるいは床面下にくい込んで丸太状、板状、茅状の炭化材が出土し、比較的壁際と中央に多く分布がみられた。柱材・梁材の明確なものはみられずほとんどが垂木としてもちいられたものであろう。炭化材の材質はナラである。

出土遺物は土師器の环形土器と高环形土器であり、他に縄文・弥生式土器片の混入がみられた。高环形土器は、脚部が残存しており、円柱状から裾部で極端に開き外反し水平になるものであ



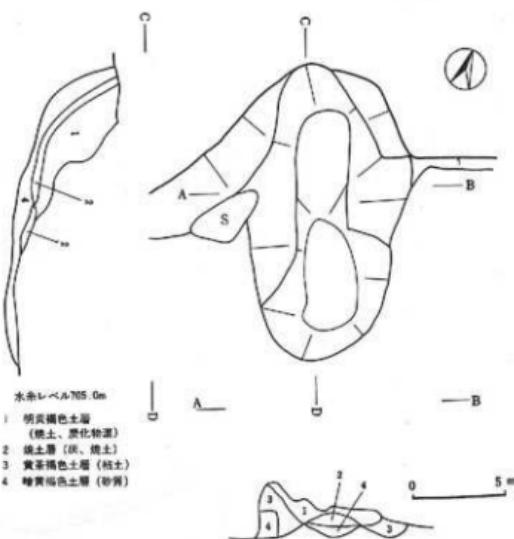
第28図 H1号住居址炭化材出土状況



第29図 H1号住居址実測図



第30図 H1号住居址出土遺物実測図



第31図 H1号住居址 カマド実測図 (1:30)

る。茶褐色で全面にミガキが施こされる。环形土器は丸底でヘラ削りされ、中位で棱をもち直立し、口辺上部はわずかに外傾外反する。口辺部は横ナデが施こされる。口径13.4cm、器高4.8cmを測り、褐色を呈す。

本住居址はカマドが北壁中央に構築されており、外縁を有する环形土器等の特徴から古墳時代後期中葉に比定される。

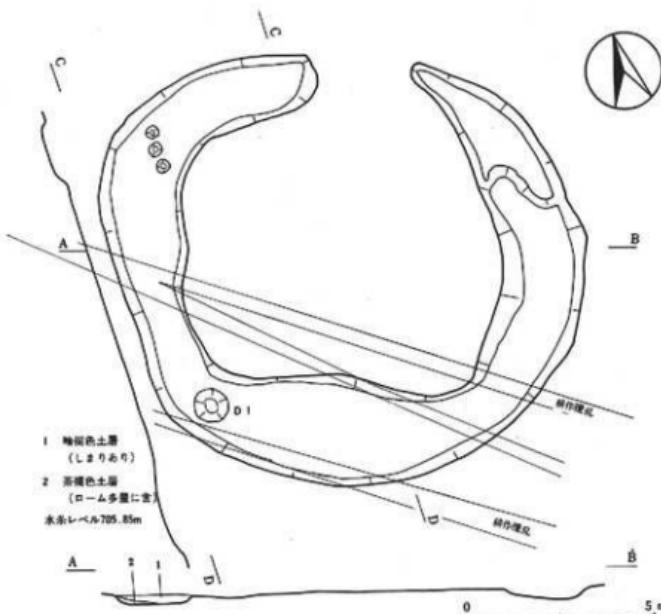
(工藤かよ子)

2 方形周溝墓

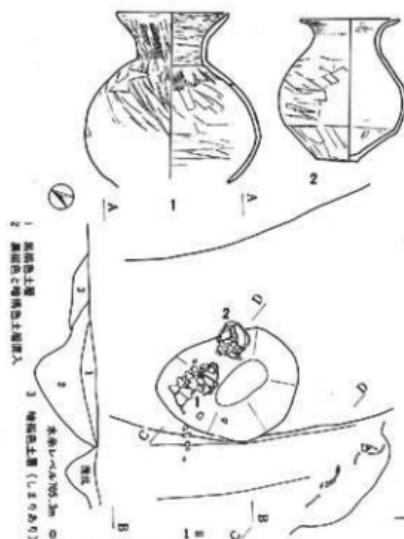
1) HM1号方形周溝墓

HM1号方形周溝墓は、か～こ～1～5グリッドに位置し、南西コーナーにD1号土壙を有する。方形周溝墓は全体層序第V層上面で確認されたが、耕作土が浅く擾乱の影響も大きく、周溝は大部分削平されているようである。封土は認められていない。

周溝は北側中央で陸橋をなしている。台状部は、東西840cm、南北734cmを測り、東西がやや長い隅丸長方形を呈す。周溝を含めると東西は1220cm、南北1142cmを測り、周溝の外周は北東側は円形に近く、南西側は方形に近い。周溝の幅は一定ではなく、いちばん狭い所は陸橋附近で、



第32図 HM1号方形周溝墓実測図 (1:150)



第33図 D1号土壤実測図 (1:40)

66cmを測るが、全体的には 140cm～290cmである。深さ 7～30cmで、隙縫東側は除々に浅くなつて切れている。周溝底には、北西コーナーに径30cm、深さ30cmの円形のピットが3個検出された。D1号土壠は南西コーナーにあり、103cm×80cm、深さ28cmで、壺形土器3個体を伴っていた。台状部における土壤等の遺構は検出されなかった。大部削平され、かつ検出した遺構プラン内も擾乱されている所が多くた。南西コーナーの落ち込みをあえてD1号土壠と名称を与えたのは、周溝覆土とこの土壤覆土とが色調や含まれるものに明確な差異が認められなかつたものの、出土した土器が周溝内では全般に

わたって小破片であるのに対して、土壙内に限ってまとまったものが出土しており、單一の土壙として存在した可能性がないとは断定できないためである。

遺物はD1号土壙を除いて破片である。第1層黒褐色土中より、壺が3個出土した。これらの中の壺は箱清水式の様相ある壺C類(36-4)と胴下部の稜に箱清水式の様相を留めるE類(36-3)、これらに対してより次期の様相を強くする36-2が伴出している。36-3は外面が口辺部を除く頸部以下を縱・横・斜方向にハケによる調整がなされている。塗彩もされず、ミガキも施されない。36-2は塗彩されず、ハケ調整の後口辺部にヨコナデ、以下はみがかれている。胴下部に弱い稜が認められる。内面はハケ調整、口辺部のみヨコナデ。

本遺構は、弥生時代箱清水式の要素をもつ壺と次代の古墳時代初頭の土器の要素を強くもつ壺が共存して、弥生時代から古墳時代への過渡的位置の遺構と思われる。

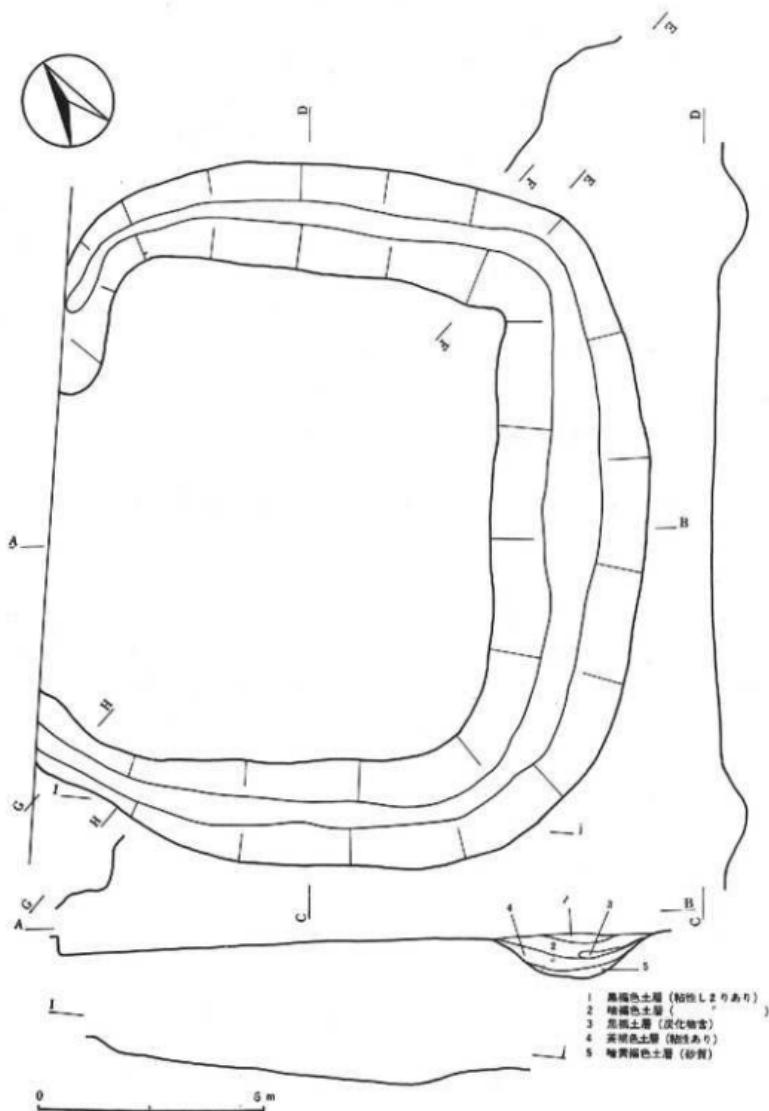
2) HM2号方形周溝墓

HM2号方形周溝墓は、グリッドくーセー21~26に位置し、全体層序IV層上層上面で確認された。封土は認められないものの、やや台状部が高い。

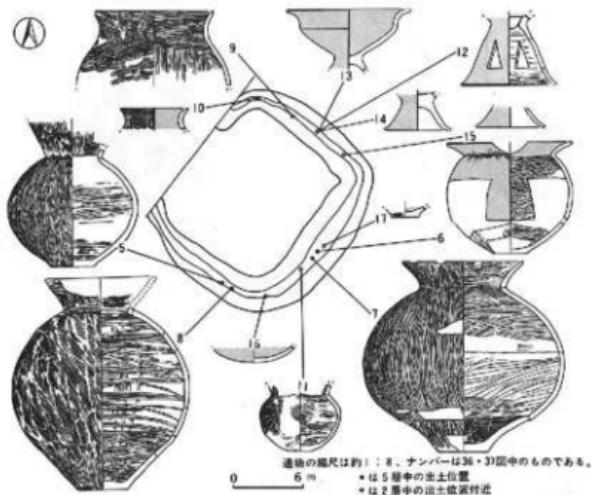
周溝は、北西で陸橋をなしていたものと思われ、北コーナーの溝は立ちあがりをみせている。台状部は、北東辺から南東辺1325cm、北西辺から南東辺は1060cmを測る隅丸長方形になり、周溝を含めると長軸は1860cmを測り、周溝の外周は胴張りの隅丸長方形を呈す。周溝の幅は、南東辺が最も広く415cm、南コーナーで325cm、東コーナーで300cm、北コーナーで150cm、西で最も狭い135cmを測る。深さはやはり南西辺中央部が深く、121cmを測り、南コーナーで75cm、東で64cm、北で56cm、西で54cmである。周溝は南東辺に幅広く深く、西側に行くに従って幅狭く浅くなる。周溝底より遺構は検出されなかった。台状部も主体部たる落ち込みはみられなかった。

出土遺物は、弥生式土器、土師式土器両者がみられた。土師式土器は、図示したように、南東溝・南西溝より出土し、第5層上面ないし4層中に含まれるものではほとんど完形品に近い状態で出土している。それに対し、弥生式土器は、北東溝から南東溝にかけて、第2層中より集中して出土している。これらは後から混入したものと思われる。

土師式土器の壺形土器の36-7は、口辺部短く頸部より「く」の字状に外反し、胴部は球形をなし下部に稜をもって底部に至る。調整は外面ミガキ、内面は稜下位がハケ、他はヘラナデによる。36-5は壺形土器で、球形の胴部に長い外傾する口辺部をもつ。外面及び内面の口辺の一部ミガキ、内面下部は細いハケ、他はヨコナデ調整される。37-8は、短い口辺が頸部より「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈し直線的に底部に至る。外面はハケ目を残してミガキ、口辺部はハ



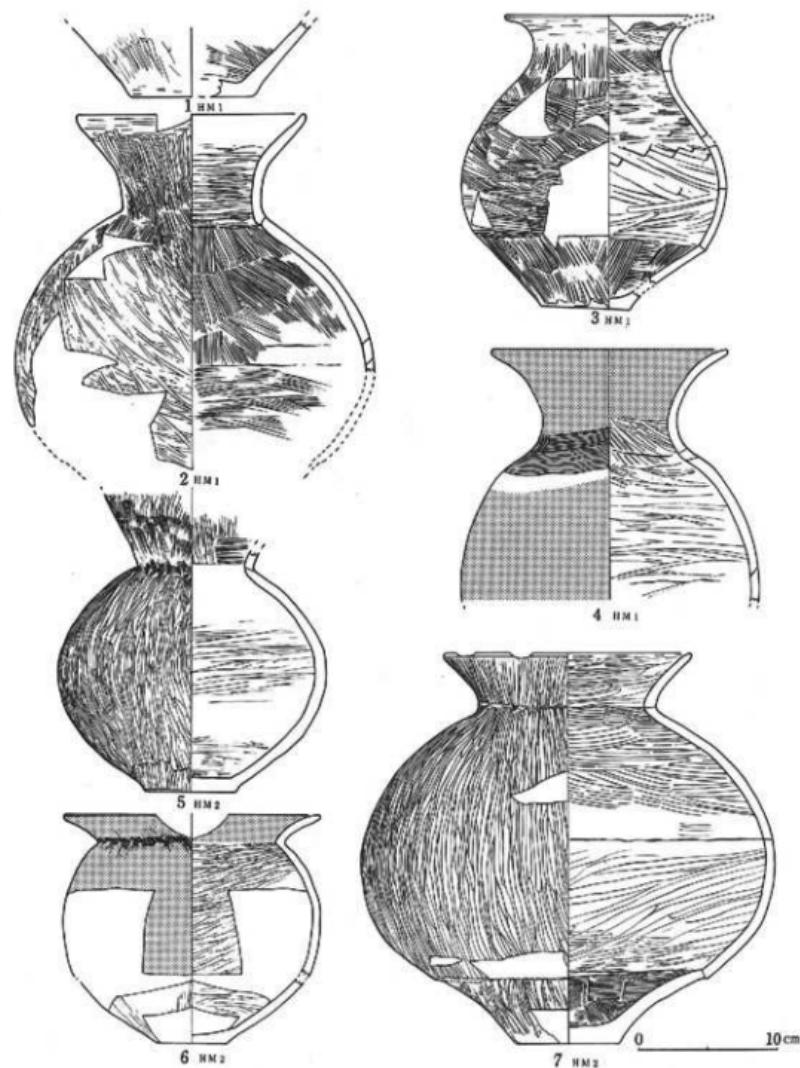
第34図 HM 2号方形周溝墓実測図 (1 : 150)



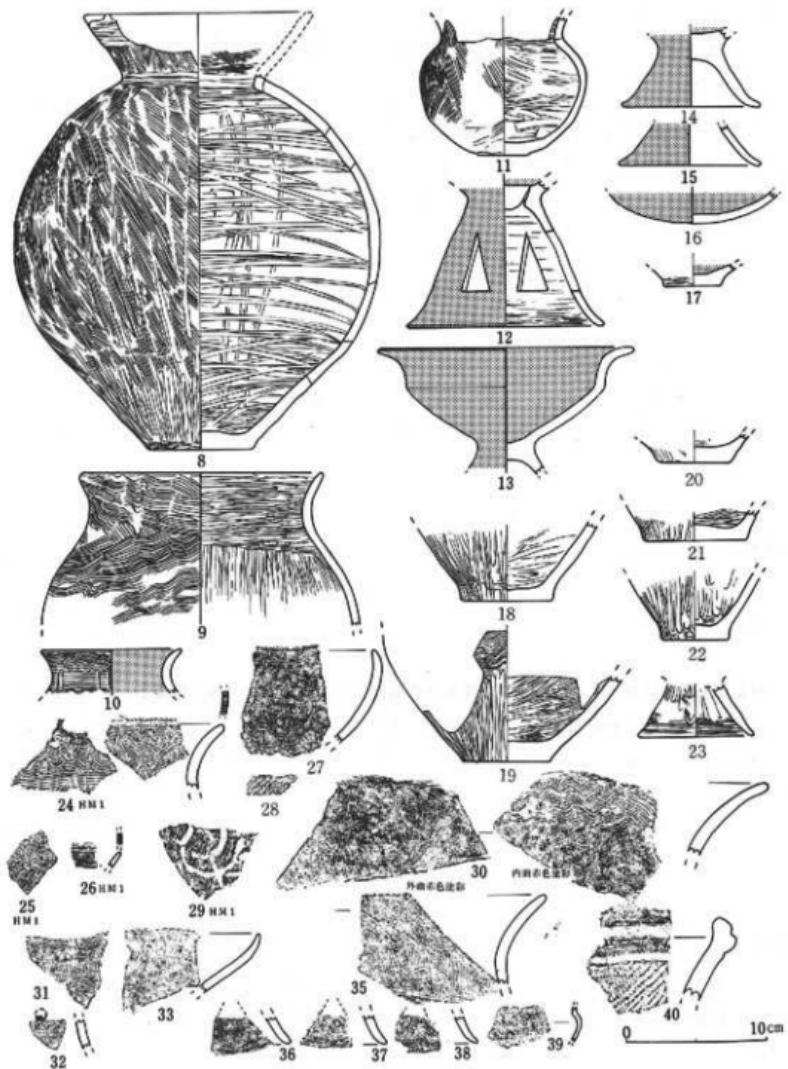
第35図 HM 2号方形周溝墓遺物分布図

第6表 HM 1・2号方形周溝墓出土土器一覧表

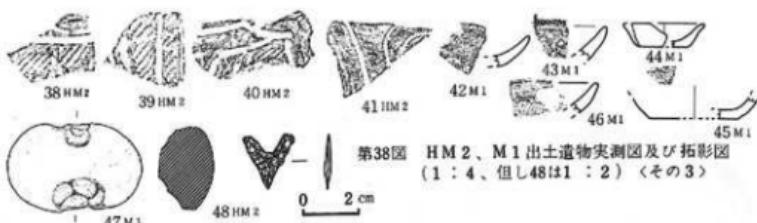
神区 部番	器種	法数	器 形 の 特 殊	調 査	備 考
36-2 室	(18.27) (28.27)	縁接合式。上部外縁が斜め、輪郭は直線形に近く、軸下部弧曲して瓶底に軽縮する。底大径 浅下付下。	外側 口縁部斜ナギ、口底部カギ形膨らカキ、底盤ハヤ目残してミガ リナギ	褐色、糊一基無地あり HM 1-D 1	
36-3 *	(15.0) (29.5) (30.5)	口縁部直く外傾し、本平になる。底盤部直角を呈す。蓋 中蓋と外蓋と大径とも、内蓋と外蓋とに軽縮する。底 盤をなして外縁部に直角に突出する。	外側 口縁部斜ナギ、瓶底ハヤ、内蓋 ハナギ、ハケ、ヘラナギ	褐色、中かみ青い HM 1-D 1	
36-4 *	(17.0) (38.0)	口邊部外傾する。輪郭形状に近づまる。	内底 底盤部吹き(16年、3~4連止め)、瓶底部吹き、口縁部・瓶底部 色刷形ミガキ、内底口沿部色刷形ミガキ、瓶底ナギ、ヘラナギ	HM 1-D 1	
36-5 壁	(22.5)	口邊部外傾的。輪郭は全体に直角を呈す。底盤 台底、平底。	外側 ミガキ、内底口沿部ミガキ、瓶底ナギ、ハナギ	褐色 HM 2 濃青色	
36-6 瓶	(18.6) (16.5) 5.0	口底部大きく斜め、少々外傾する。底盤は直く、輪郭 は直線形を呈し、瓶底は平底。	外側 口縁部斜ミナケ目、口沿、瓶底中央部ミガキ、内底口沿部直 射紋ミガキ、瓶底ミガキ	褐色青い HM 2 濃青色	
36-7 室	(17.8) (21.0) (27.4)	口縁部直く外傾外縁に平行。底盤は直線形に近く 中蓋中央に最大径をもち、下端を最も外傾して瓶 底に軽縮する。底盤平底。	外側 ミガキ、内底 口沿部ミガキ、瓶底ハケ、ヨコナギ	褐色 HM 2 濃青色	
37-8 室	(16.4) (21.0) (27.4)	口縁部直く外傾し外縁に軽縮し、瓶身 底下より前後に瓶底に軽縮する。	外側 ハナギ、口縁部斜ナギ膨らミガキ 内底 ハナギミガキ	褐色 HM 2 濃青色	
37-9 瓶	(17.4) (31.00)	口縁部直く外傾外縁し瓶底張る。	外側 ハナギ・洗底吹(斜方内に横穴) 内底 ミガキ	褐色 HM 2	
37-10 室	(20.2) (3.13)	小形品。口邊部外傾し強く外傾。	外側 口縁部斜ナギ→ヨーロピアン式底盤吹(6年、主進止め) 内底 口沿部ミガキ	褐色 HM 2	
37-11 室	(2.74)	口縁部外反、瓶底直角底。底盤は古灰にわずかに変色。	外側 ハナギ、下部ミガキ 内底 口沿部ミガキ、瓶底ナギ	赤褐色、茶褐色 HM 2	
37-12 瓶	(13.47) (9.40)	底盤は内壁気泡に外傾し中蓋に斜をもつ上部は全体に 大きく外傾外反する。	外側 赤色底形ミガキ 内底 *	褐色 HM 2	



第36図 H M 1・2号方形周溝墓出土遺物実測図(その1)



第37図 HM1・2号方形周溝墓出土遺物実測図及び拓影図(その2) (表記以外はHM2)

第38図 HM 2、M 1出土遺物実測図及び拓写図
(1:4、但し48は1:2) <その3>

ケ調整の後ヨコナデされる。内面の口辺部はハケ目を残し、胴部全体は縦及び主として横方向のミガキが施される。36-6は、淡い塗彩が外面（底部を除く）内面の口辺部に施され、外面の頸部にハケ目を残している。

弥生式土器は、壺形土器の口辺部片29は、内面に波状文があり他は赤色塗彩されている。裴形土器は、口辺部が短かく外反し、胴部に最大径を持つ。調整は外面波状文、内面ミガキである。10の 小形裴形土器は、内面に赤色塗彩が施される。他に赤色塗彩される高环形土器がある。

土師式土器は、器形、調整等より古墳時代初頭に比定され、HM 2号方形周溝墓も同時期とみられる。16は赤色塗彩された丸底を呈すもので、塗彩され丸底を呈す环形土器も2層中より出土し弥生時代末と古墳時代初頭の両要素がある。

3 土壙

D 1号土壙はHM 1号方形周溝墓に伴うため遺跡からは計13基の土壙が検出された。D 3・4・5は平面プランが弓形を呈するもので屈曲側に黄褐色土層が全体層序第Ⅳ層茶褐色土層面において認められた。土壙内の土を掘り上げたものかと思われる。覆土は第1層暗褐色土層（しまりなし）、その下に第2層黒色土層（粘性、しまりあり）、最下層第4層茶褐色土層（砂質）が充てんされていた。第1層の両脇には第3層明茶褐色土層で地山の黄褐色土層を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

D 11は、覆土の状態が変わっており、一土壙内に2ビットを有したかのように東西に黒褐色土があり、中央は、帯状に黒土と黄褐色が互層をなしている。これも遺物はみられなかった。

D 12は、M 2号溝状遺構と接する地点の上面に土器片が集中しており、壺・裴・高杯・环があり、弥生時代後期箱清水式で、住居址出土のものと同期である。覆土より炭化物が出土している。

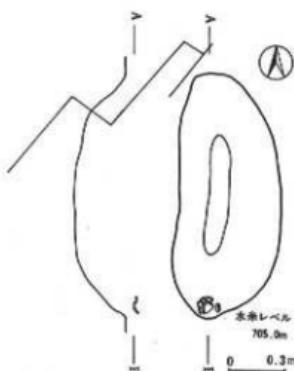
D 14は長楕円ないしやや弓形を呈し、覆土は暗褐色土層である。

土壙13基のうちほぼ時代推定のできるものは、D 12、D 14は遺物より弥生時代、D 10は縄文

S P W S P E

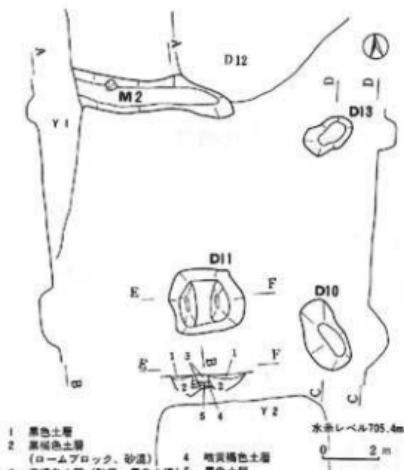


第39図 D3号土壤土層断面図(1:40)



第40図 D14号土壤実測図

3 土壌



第41図 D10-11-13号土壤M2溝状遺構実測図

第7表 土壌一覧表

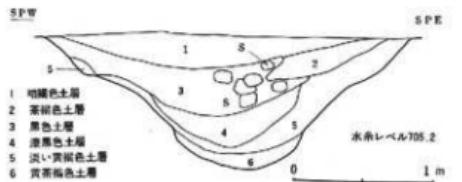
土壌 No.	形 態	位 置 (グリッド)	規 格	備 考
			長 径 × 短 径 × 厚 さ (cm)	
D 2	円 形?	お・かー18		Y 1号住居址に切られる。遺物なし。
3	円 形	す-14	240×100×52	屈曲部上面に黄褐色土伴う。遺物なし。
4	#	こ・さ-15	250×90×47	"
5	#	こ-10・11	220×80×46	"
6	長 椭 円 形	い-う-16	250×100×31	
7	開 丸 長 方 形	け-13・14	145×90×31	
8	円 形	け-16	150×52	
9	不整 圓 形	き-16	160×70×20	
10	#	え-12	260×94×81	縫文式土器片、弥生式土器片出土。
11	不整 方 形	お-13・14	270×230×59	"
12	鉢 形	い-15・16	400×110×40	上面の僅50cm深さ20cm範囲より土器多量出土。
13	不整 圓 形	い-13・14	184×110×40	
14	長 椭 円 形	て-20	260×110×50	赤色漆跡上面より出土。

時代と弥生時代の両者を含み、後代の遺物の混入はみられない。他は明確に時期を判明するに資料が乏しい。

4 溝状遺構

1) M 1号溝状遺構

M 1号溝状遺構は、リ-26グリッドからな-13グリッドにかけて南北に走る溝状遺構である。幅250cm~270cmで深さ95cmを測る。水の流れた痕跡はない。け-さ-19・20グリッドにおいて径30cm大の河床礫が、確認面より30cm下に集石しており、陸橋の用途を果したのではないかと見ら



第42図 M 1号溝状遺構土層断面図

れる。出土遺物は、弥生式土器片もみられたが、土師質土器片も上面ながら検出され、時代決定は明確にはなし得ない。

ただ、第二章でも触れたように対岸に所在する大井城跡と関係のある遺構とも考えられる。

2) M 2号溝状遺構

M 2号溝状遺構はう・え-15・16グリッドに位置し、西側をY 1号住居址に切られている。溝幅 120cm、深さ38~43cm、東端はD12に上面で切られている。北壁には柱穴が1個あり径20cm深さ70cm（上面より）を測り、北に傾斜を持っている。遺物は彫形土器胴～底部が出土している。

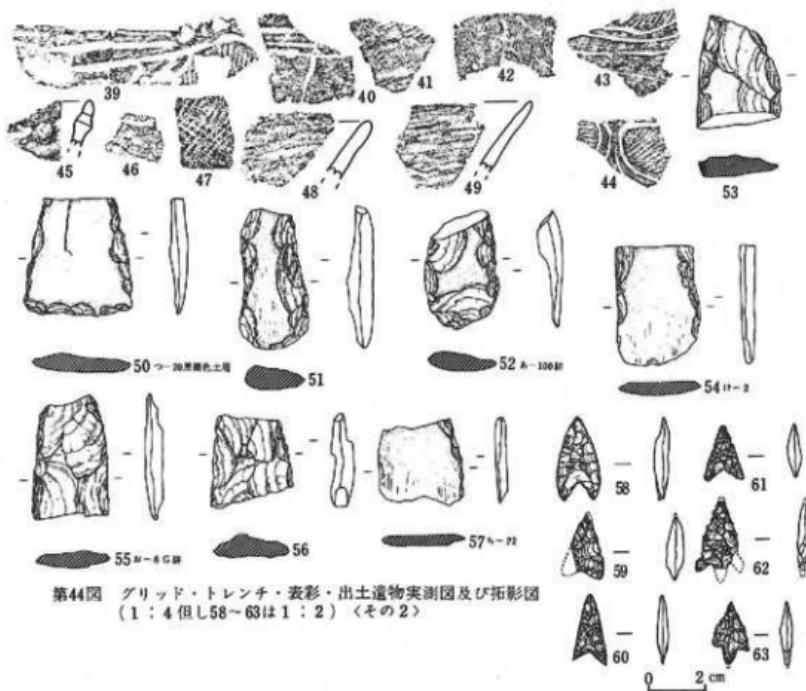
5 グリッド出土・表採遺物

グリッド出土及び表採遺物には、縄文時代、弥生時代、平安時代の土器と縄文時代の打製石斧と石鐵がある。

縄文時代の土器は、いづれも破片だが後期壠の内式の深鉢や往口土器がみられ、小量だが中期後半の曾利式の深鉢も出土している。石器は打製石斧が8点あり、多くは玄武岩を用いている。先端付近には、リングやフィシャーが消え去る程の使用痕が観察できる。



第43図 D10・D12・D14・トレンチ・グリッド出土遺物実測図(その1)



第44図 グリッド・トレンチ・表彰・出土遺物実測図及び拓影図
(1:4 但し58-63は1:2) <その2>

V 総括

今回の調査で住居址 6 棟、方形周溝墓 2 基、土壙 13 基、溝状遺構 2 基を検出し、遺物は繩文時代中・後期、弥生時代後期、古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代・中世のものが出土した。

1 繩文時代

明確な遺構は検出され得なかったが、遺物は中期後半の曾利式土器が小量と後期の堀の内式及び加曾利 B 式土器が出土した。主に深鉢と注口土器の器種がある。石器は打製石斧と石鎌が出土した。打製石斧は、ほとんど短冊形で、石質は玄武岩である。先端及びその付近には、使用によって生じた磨耗及び擦痕が観取できた。

2 弥生時代

1) 遺構

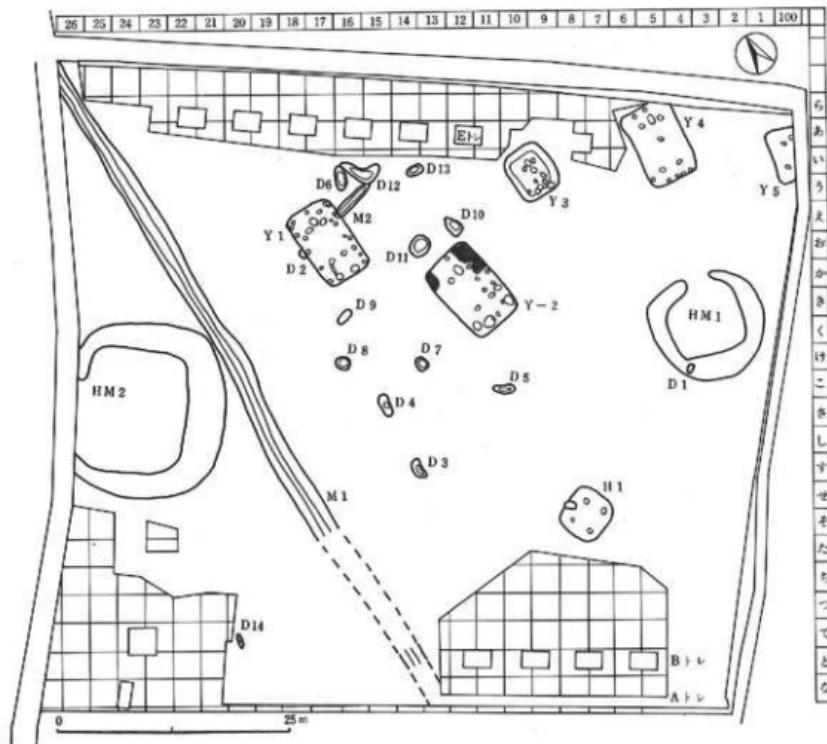
弥生時代の住居址は 5 棟検出され、調査区域北側で前後しながらも東西に並び、最大規模の Y 2 号住居址が南端にあり、北側に調査区域外にも続く集落の最南端にもあたるものと思われる。主軸方位は、Y 5 号住居址がやや西を向くかほぼ北方向を指す。

住居址規模は大小がみられ、Y 1・Y 2・Y 4 号住居址は長辺が 9 m 前後の隅丸長方形を呈する一群と、Y 3・Y 5 号住居址の長辺が 6 m 前後を測り方形を呈するものである。

覆土は、自然堆積の層序を示しており、Y 3 号住居第 2 層だけが茶褐色と黒褐色の土がブロック的に混在していた。この第 2 層中の高杯と Y 4 号住居址上層出土の破片が接合関係をもっており、何らかの関連性があると思われる。

床面はいづれも第 V 層黄褐色土層が踏み固められていたが、砂質のため壊れ易く、堅鐵であった Y 1~3 号住居址であっても床面精査の際に壊しがちであった。壁についても同様であり、崩壊度は著しかった。

住居址内ピットは、いづれも主柱穴は 4 本で、補助的ピット、壁柱穴を伴う。住居址の入口にあたる南壁下中央には 2 本対のピットを設け、北壁下中央にももつ。貯藏穴と思われるピットは、やはり南側床面にあり、Y 1 号住居址は入口のピットと兼ね、Y 2 号住居址は両コーナーと入口施設の西に計 3 個もち、Y 3 号住居址は南壁下中央より東にあり、Y 4・Y 5 号住居址は検出されなかった。



第45図 下小平遺跡 全体図 (1:600)

第8表 下小平遺跡一覧表

遺構	平面プラン			カマド・炉	ピット	備考
	形態	南北	東西			
Y 1	隅丸長方形	896cm	556cm	N 地床炉(北) 焼造設炉(南東)	主4、炉2 他29	
Y 2	隅丸長方形	942	582	N-5°-W 地床炉(北) 地床炉(南東)	主4、炉3 他21	ベッド状構造あり
Y 3	隅丸長方形	550	460	± 地床炉(北)	主4、炉1 他2	
(Y 3)	#	420	320	# 地床炉(中央)	他2	Y 3住内下面プラン
Y 4	隅丸長方形	873	537	N-5°-E 焼造設炉(北)	主4、他10	
Y 5	隅丸長方形	592 (440)	N-22°-E	焼造設炉(北)	主2、他3	半壁のみの調査で全容は明らかでない。
H 1	隅丸方形	480	500	N-25°-W カマド(北)	主4	

炉址は、Y1・Y2号住居址では北と南東の2ヶ所に設けられ、Y3・Y4・Y5号住居址は北側のみである。一棟の中で地床炉と土器埋設炉を併用しており、土器は壺・甕形土器の胴～底部を使用している。Y1号住居1は土器を埋設していたのか炉床面が軟弱であり、Y3号住の炉は堅く、粘性のある土で固められていた。また、炉辺石を置いており、主炉では炉の南側に、Y2号炉2では西にみられた。Y5号住居址の埋設炉は地山に直接埋設せず、炉底に他の土を置く。

炉内から鉄製品が出土していることは注目されよう。

Y1号住居址においては、明らかに段差のある入口の段が南壁中央の住居址内に検出され、地山をわずかに高く残し、粘性のある土と鉄平石で構成している。Y3号住の南側の鉄平石も入口施設が崩壊したものと思う。

後述するY2号住居址のベッド状遺構の検出、Y1号住溝、Y3号住の拡張等々空間利用についても興味深い資料を得た。

ベッド状遺構について

Y2号住居址でベッド状遺構が検出され、佐久地方では弥生時代から古墳時代通して初例である。検出例は県下で7遺跡8例と少なく、同じ遺跡内でも1・2棟と数多いものではない。時期的には弥生時代中期～古墳時代後期に該当する住居址においてみられ、壁際の土床の一部あるいは全部が他の部分より高い平坦面を有するものをいい屋内高床部である。^(注1)

これらを考慮するに、まず形態の一様でない事に驚きを覚えるが、住居址の形態に強く影響されることは当然であり本項では、熊野正也氏の便宜的に分類されたものに従う。^(注2)

- A類 隅円方形プランを呈する住居址にみられるもので、壁面の一辺に設けたり、あるいはまた両壁に平行に設けるものもある。
- B類 長方形もしくは隅円方形のプランを有する住居址にみられるものでL字状の形を呈する。
- C類 長径と短径の差が割合小さな長方形ないし隅円方形プランの住居址に設けられるもので、コ字形に配される。
- D類 正方形に近い隅円方形のプランを持つ住居址にみられるもので遺構は壁面の四周にめぐらし、いわゆる□形に配する。
- E類 隅円の長方形のプランを呈する住居址に設けられているもので、一辺の壁面に方形状の小さな遺構を設けている。
- F類 この形は特殊なもので、六角形のプランを持つ住居址に限られる。遺構もそのものの壁面に沿って六角状に配される。

その他に併用しているものがあり、特殊な形を呈するF類を除けば各類のものがだいたい全国的に及び普遍的なものと言えるとしている。

下小平遺跡はE類に該当するが、その設置個数は複数である。

次に県内における実例をあげてみる。（挿図参照）

1. 北原遺跡 7棟中1棟（弥生中期後半）最大規模を示し、中央部に位置する。
2. 酒屋前遺跡 8棟中1棟（弥生後期）規模・出土遺物中心性なし。中央に位置する。
3. 月夜平遺跡 10棟中2棟（弥生後期）座光寺原・中島期に一棟。規模形態並。
4. 壇光寺原遺跡 9棟中1棟（弥生後期）ベッド状遺構か疑問、規模遺物甚。
5. 的場遺跡（注7）（弥生後期）
6. 堂垣外遺跡 1棟（古墳前期）
7. 三輪遺跡 6棟中1棟（古墳後期）北端中央。規模大。溝遺構あり。造り出し。
8. 下小平遺跡 5棟中1棟（弥生後期）最大規模。遺物量多く汁器個体数多い。

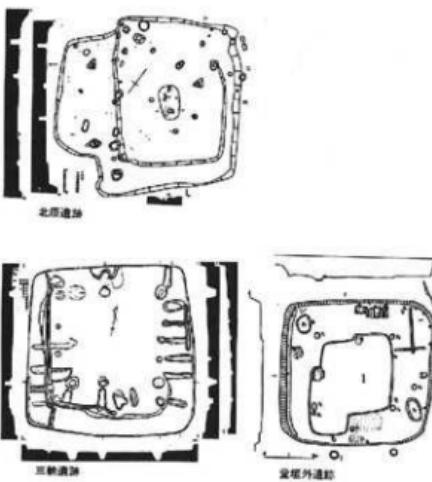
規模・形態・出土遺物については、各遺跡毎において異なり、その構造についても、地山を掘り残す造り出しと後から他の土で構築するものがある。

ベッド状遺構の性格については、諸氏が諸説を述べている。

昭和29年東京都道灌山遺跡において、宮ノ台期の3棟の内一棟に南壁と柱穴間の部分が床に比して高い事が報告されており、昭和34年に千葉県我孫子中学校校庭遺跡が調査され、床面より一段高い施設を「ベッド状遺構」とし、その性格を寝所と考え、低位の床を作業場と考えた。

昭和41年『日本の考古学III』において、和島誠一・田中義昭は、ベッド状遺構が

関東から九州地方に普及していること、集落内における特殊性、つまり大形住居址や特別な遺物を含む住居址同様に集落の中心性を指摘している。また、寝所としての性格づけも行い、ベッド状遺構の面積より人員を割り出している。昭和42年、沢田大多郎は、ちょうど時期を同じくして発生してきた方形周溝墓と関連させて、方形周溝墓に埋葬される階級のものがベッド状遺構を有するとしている。昭和48年熊野正也氏は、集落内における特殊な位置、また絶対数が少なく、床面積の割合が大きく、集落内において中心的な位置にあり、祭祀的遺物を含む事等より、何故集落において单一の住居が持ったのかという点からして、ベッド状遺構は祭壇としての意味を持ち、



第46図 他遺跡ベッド状遺構実測図

居住者は司祭的性格を有するのではないかとしている。昭和50年にいたり、河野真知郎氏は方形周溝墓の事例を検討し、時期的にはベッド状遺構の方が出現・終末ともに方形周溝墓より一時期遅れるが重なる部分が多く盛行期も一致しているとし、関東と関西ではベッド状遺構の設けられる割合、集落における位置が異なる事を示し、関西ではその割合が高いに対し、関東では一軒とはいえないが、やはり他と聖別されるものであるとしている。一応ベッド状遺構を寝所とはするものの、司祭者としての資格を有するものがベッド状遺構を作る資格があると仮定している。

^(注15) 同じく昭和50年に石野博信氏は、床面に踏みしまりが少なく、間仕切り溝と室内高床部が一棟の住居址で併用されることがない点をあげ、住居建築時に使用目的別に床面を作成したと述べ、寝所あるいは物置場として使用したかと推定している。

^(注16) 以上、寝所・祭壇・作業場・物置場の4説があり、方形周溝墓との関連性や集落内における中心性の問題を踏まえて論議されているが、各説が遺物・遺構について、あらゆる点で合致するには、まだまだ資料不足の感があり、推論の域を脱しない。

下小平遺跡Y2号住居址については、集落中最大規模を呈し最南端に位置する。小形の环や高环形土器という汁器形態の土器が多量に出土し、しかもベッド状遺構の増設が為され上面もたたいて堅められ、除去後も堅硬な床面を検出し、ピットや溝が検出されたことを明記しておく。これから調査の中で今回のベッド状遺構の性格が明らかになることであろう。より精密広範囲の調査が望まれる。

註

- 1 河野真知郎「初期魚群墓の解明——ベッド状遺構の再検討——」『CIRCUM PACIFIC I』(1975) 雄文時代中期に千葉県松戸市子和清水坂でベッド状遺構が検出されている。ただ弥生時代中期に連続する資料がない。
- 2 石野 博也「弥生時代墓の一つ考察——ベッド状遺構をもつて居址を中心として」『史解』第2号(1969)
- 3 長野県高森町教育委員会『北原遺跡』昭和47年(1972)
- 4 日本道路公団・長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』昭和47年度(1973)
- 5 高根町教育委員会『月夜平』昭和45年(1970)
- 6 今井 善光「做田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』第4号 昭和42年(1967)
- 7 松川町教育委員会『塙場』昭和48年(1973)
- 8 桐原健・御子柴泰正「長野県伊那郡得笠原堂外遺跡調査概報」『信濃』21-4(昭和44年)(1969)
- 9 長野市教育委員会『三輪遺跡』(1980~3)
- 10 早稲田大学考古学研究室『道灌山遺跡』(昭和30年)(1955)
- 11 吉田章一郎・田村晃一「千葉県我孫子町中学校校庭遺跡」『考古学雑誌』47-1(昭和36年)・田村晃一「我孫子中学校校庭遺跡」『我孫子古墳群』
- 12 和島誠一・田中義昭「住居址と集落」『日本の考古学』(昭和41年)(1966)
- 13 西田大太郎「古墳発生における社会」『考古学研究』53(昭和42年)(1967)
- 14 註2に同じ
- 15 註1に同じ
- 16 石野 博信「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会思想社(1975)
- 17 註8に同じ
- 18 本遺跡でも方形周溝墓を検出しており、ベッド状遺構との関連について注目されるが、単に遺物だけの比較では住居址が先行しており、住居址の遺物と方形周溝墓の遺物に時間差があるため直接関連づけることは不可能かと思う。

土壤は14基検出されたが弥生時代の遺物が出土しているのはD10・12・14号土壤である。D14号土壤より、赤色塗彩の鉢形土器が出土していることより、弥生時代後期に比定されるものと思う。遺物を出土しない弓形の土壤についても略同時期ではないかと推定するものである。

溝状造構は2構あるうちのM2号溝状造構が該当する。M2号溝状造構からは弥生時代後期の土器が出土しており、この期に比定されるものと思う。

2) 遺物

弥生時代の土器は、壺・甕・高杯・环・瓶がある。文様はほとんど備で描いており、ことわりのない場合は、例えば、備描縦状文をあらわす。赤色塗彩は塗彩と略す。

壺は主に口辺部の特徴からA～Dに分類した。無塗彩のものは調整が特に観取でき、刷毛目調整の後口縁部ヨコナデ、そして、ヘラミガキされる。

A (8-21, 15-45-47・49, 19-1~3, 23-11・12・14, 27-1・3~5, 43-10)

口縁部がL字状または袋状の有段口縁をなす。8-21や43-10のように有段部分が無文で無塗彩のものもあるが、ほとんどの有段部分には振幅の小さな波状文が施文され外面及び口辺部内面が塗彩される。19-1~3は口辺部が大きく外反し、それぞれ異った装飾をもつた有段部分を有し、体部が強く張る。1・3の有段部分には波状文が、さらに3の口唇部には刻目が施される。2の有段部は弱いS字状を呈し無文である。頭部文様は1がT字文と縦状文、2がT字文のみ施されている。

B (8-20, 14-2, 37-33)

口縁部が内凹し受け口状となり、体部が張る。塗彩されるものと無塗彩のものがある。頭部には縦状文や横線文が施文される。

C (14-1, 15-48, 37-34)

口辺部が外反する。口辺部内外面塗彩される。15-48は口唇部に波状文が、37-34は口縁部内面に波状文が施されている。

D (8-1)

口縁部が内傾し器肉は全体に他のものより分厚い。無塗彩で頭部に縦状文が施文される。

E (36-3)

口辺部強く外反し、端部はほぼ水平になる。最大径を胴部中位下にもち胴下部には棱がある。外面の調整は、棱より下を斜めの、胴部を横、頭部を縱方向にそれぞれハケメ、口縁部ヨコナデし、内面は胴中位付近がナデの他はハケメである。無塗彩・無文。

この他拓影で示した8-25、15-50~52はいづれも頭部付近破片であり、外面赤色塗彩されている。横線文及び半円弧文が施される。また、37-31には縦状文、波状文に縱方向の短線文が組み合せて施文されている。

表は器形の大きさで、大(A)・中(B)・小(C)とし、さらに文様の有無、口辺部の特徴最大径のありかたからa～gに分けられる。a 口辺部外反、口縁端部が内側し最大径が胴部にある。b 折り返し口縁をもち、最大径が胴部にあるもの。c 口辺部弓状に外反し、最大径が胴部にあるもの。d 口辺部緩く外反し、最大径が胴部にあるもの。e 口辺部が直線的に外傾し、口径と胴部最大径がほぼ等しい。f 口辺部短く外反し、口径が最大径となるもの。g 口辺部短く外反し、口径と胴部最大径がほぼ等しいか、最大径が胴部にあるもの。h ほぼ無文様に近いもの。

A a (23-3)

口辺部及び胴上半部波状文が施文され、頭部には簾状文が巡る。

A b (8-27、14-9、15-5・57・59・63-64・67、23-15)

ほとんどが口辺部付近の破片である。14-9頭部に簾状文を持たず口縁部の折り返しから胴部まで波状文が施される。8-27、15-56・57・59・60は波状文、15-63・64は斜状文が施文されている。折り返し部分が無文のものに15-67、23-15があり、折り返し以下は斜状文が施されている。

A c (8-29、15-61・62・66、19-10、23-1・5、37-35、43-13)

口辺部から胴上半にかけて施文される文様は、波状文の8-29、15-61・62、19-10、37-35、43-13、及び斜状文の15-66、23-1・5がある。簾状文は波状文及び斜状文が施文された後に右回りに施される。

A e (23-2)

口辺部及び胴上半部とともに斜状文が施され、後に簾状文が巡る。A cより胴部の張りが弱くなっている。

B d (14-11、23-4、37-9、43-2)

23-4、43-2は口辺部から胴部上半にかけて波状文、簾状文が施文されているが、14-11は、口辺部に波状文、頭部の簾状文以下には斜状文が施されている。37-9は、簾状文が施されておらず波状文のみである。

B h (14-13)

口辺部外反し、口縁端部で若干内側気味になる。頭部に簾状文がみられるが、口辺部に波状文は施されず、口唇部に竪による刻目及び口辺部内面に上方に向けての条痕が認められる。

C f (14-10・14・18、19-17)

いづれも波状文が口辺部及び胴上半部に施され、波状文の後に簾状文が施文されている。

C g (8-5、23-7、37-10)

8-5は他の波状文と施文順序が異っている。すなわち、胴部の波状文が頭部に向けて順次

施文されている。23-7、37-10は口辺部内面に塗彩される。

C h (14-16)

C f とほぼ同様の器形であるが、外面ハケメの後口辺部ヨコナデを行っているものの文様は施されない。内面は胴下部ナデ、胴上部から口辺部横方向のヘラミガキ調整である。

高环の出土点数は多いのであるが、环及び脚部のそろったものは少い。口縁部の特徴等环部の相異からA～Cに分類した。

A (20-26、23-9)

环部中位の外面に棱をもち、棱から直立気味に立ち上り、口縁部は内稜を持って直線的に外方に折れる。内外面塗彩される。

B (8-13、15-40、37-13、43-8)

环部中位の外面に棱をもち、棱からAよりは開き気味に立ち上り、口縁部外反する。8-13、15-40は口唇部に突起をもつ。环部内外面塗彩、脚部外面も塗彩される。

C (15-34)

环部が橢状を呈し、口縁部内彎する。小形で脚部高は僅か2.5cmである。脚部内面を除き塗彩される。

この他に、环部と接合しない脚部が多量にあり、大形のもの（A・Bに入ると思われる）15-41、37-12、小形のもの8-14、15-35～39、19-22、37-14・15がある。小形のものは脚部高3～4cmであるが、15-38は特に小さく1cmを測る。すべて外面塗彩される。大小ともに円形や三角形のスカシをもつたものもある。脚部の形状はほぼ同様で、ラッパ状に開き、裾端部でさらに聞く。

环は口縁部の形状からA～Cに分けられる。

A (15-26、19-19、43-4・5)

底部から全体に内彎気味に開き口縁部が内彎する。43-5のように口径が17cmと大形もある。

口縁部に2孔穿孔される例がある。5を除き内外面塗彩される。

B (15-27、43-9)

底部から内彎して開き、口縁部棱をなして直立気味になる。片口を有すものがある。内外面塗彩されている。

C (8-16)

底部より外反し、口縁部で棱をなして外傾する。口縁部2孔、塗彩されている。

瓶は1点（15-42）あり、环Bの器形に似る。内面にハケメを残し、無塗彩である。口径10cmを測る小形で、焼成前に1孔穿孔されている。

以上本遺跡の5棟より出土した土器は、壺A・B類及び甕A b・A c類にその特徴をとらえることができよう。前者及び後者とも多少の差はあれ各住居址より出土している。また、5棟とも重複関係をもたず1棟を除きほぼ同様な形態等であり、所産の同一時期が考えられる。本遺跡の土器群は、善光寺平を核として千曲川水系に存在する弥生時代後期箱清水式土器の範疇にあるといえる。千曲川水系における弥生時代後期の編年研究は、從来幾多の先駆諸氏によって型式細分されてきたが、その主なる資料は善光寺平及びその近隣を中心とする地域より出土したものでもってなされている。千曲川上流にあたる佐久地方の型式編年確立を求めるには、まず、その諸要素を把握しなければならない。後期の型式編年は、初頭の吉田式から箱清水式さらに御屋敷式と
(注1)
 なされているが、箱清水式が細分されI・II式とする考え方とそれは地域差であるという二者の立場がある。(注2)
 近年に至って、佐久地方出土土器は白田武正氏により四類型に細分されており、さらに、佐久地方の南部と北部との地域差及び上小地方や北関東地方との関連も指摘されている。(注3)

さて、当地方の型式編年を確立するにあたって、無視できないことは、この地方と善光寺平との位置的環境の相違がある。東の秩父山地越えに北関東地方と、西の蓼科山塊越えに中・南信地方と、千曲川を下降すれば上小地方を経て善光寺平へと、さらに、南の野辺山高原を経由すれば甲府分地と四方の平に通づる地理的位置に佐久はある。千曲川水系において、南信地方及び北関東地方と距離的には、もっとも近いといえる。

さて本遺跡出土の土器群についての編年位置付けであるが壺Aにみられる有段口縁及びその部位への波状文の施文は、安源寺III類に類例をみるとできる。桐原健氏は安源寺III類をもつて弥生時代後期に位置付け箱清水I式としている。箱清水I式のメルクマールとして、壺の口縁部に立ちあがりがみられ頸部が比較的長く大形品が多いとし、構造T字文や円形貼付文の貼付をあげている。赤色塗彩は未発達だとしている。箱清水II式では壺はI式同様胴部が無花果形を呈するが下腹部の稜線は明瞭で以下底部へ向かって強くこけている。また口縁部の立ちあがりは見られないとしている。(注4) 白田武正氏も佐久の弥生時代後期を4分類する中で佐久第2類として、中期からの口縁形態で受け口状の有段口縁の存在をあげており、箱清水I式の概念に一致し、第3類では弓状に外反する壺形土器が主体を為すとしている。(注5) 笹沢浩氏は多くの論説の中で吉田一箱清水—御屋敷という後期の型式編年を設定し、箱清水式土器については千曲川流域でも飯山・中野地方など千曲川下流域や佐久平などの上流域では、善光寺平の箱清水土器とは微妙な相違があるとし、下流域では壺口縁部に波状文や段をもつもの、上流域では群馬県の樽式土器と共にした壺や甕がみられ、壺口縁部の波状文と口縁の段がこの期に善光寺平において認められないことから、これらの相違を時間差ととらえず地域差と考えている。本遺跡の壺は、有段口縁及び口縁が内彎し、その部分に波状文が施されたものが多い。平縁で弓状に外反する口縁をもつものもある。(注6) 下小平遺跡出土の壺Aは胴下半との接合部を欠くため胴下半の形態についてはあきらかでない

が、安源寺遺跡Ⅲ類が長頸で、口徑と胴最大径との差が少ないので対して、本遺跡の壺Aは短頸で胴最大径の方がかなり大きく、体部が球形に近く強く張っている。桐原氏の後期の推移として、大形品から小形品へ、長胴形から球形への変化を述べているが、下小平遺跡の壺Aの胴部形は新しい様相を呈しているといえよう。本遺跡より先行し吉田式併行期に位置づけられる市内周防畠B遺跡からは、多量の土器が出土し、壺は平縁の口縁をもつものと受け口状口縁のものとがあり本遺跡壺Aは認められない。当地方でこの壺Aの有段口縁は、吉田式併行期で類例は少いが、西(注7)一里塚遺跡において若干認められる。

本遺跡の主體をなす箱清水式期の壺は、壺Aにおいて篠沢氏のいわれる吉田式壺D₁・D₂類に強い類似性をもち、壺D及び頸部付近破片の同心円弧文は天竜川水系の後期のものに類似性が認められる。また、壺E及び伴出の壺は、箱清水式の要素を残しながらも次期の要素が多くみられ、住居址群出土の土器群とは明確に時間的差が看取される。

一方壺は、A c類が主體を占めており、A a・A b類は資料的に小数である。文様的には、波状文の他に斜状文があり両者の存在はほぼ等しいといえよう。

以上本遺跡出土の弥生時代後期の土器を壺・甕を中心に概観したが、総じてその様相は千曲川下流域の安源寺Ⅲ類に規範性が認められる。しかし、前述してきたように幾つかの相違もある。

さて、箱清水式の細分についてであるが、従来の幾多の論説の中での箱清水I式の特徴を箱清水式土器の主體的文化圏の周辺の現象としてとらえられるかどうか、この問題について臼田氏は、器形的には壺の受け口状口縁と甕の折り返し口縁、文様的には壺の口縁部に施文される波状文と甕の斜状文(綾杉状文)がポイントであると指摘されている。当地方の箱清水式期の壺口縁部のあり方は、後沢遺跡Y14・Y24号住居址、一本柳遺跡Y1号住居址、清水田遺跡Y4号住居址、本遺跡Y1～Y5号住居址にみられるように、有段口縁・受け口状に内側する口縁でその部分に波状文が施されるものと平縁口縁のものがある。さらに付け加えると、箱清水式のメルクマールともいわれている口縁部朝顔状に大きく外反するものは、住居址一括出土としての顯著な資料が欠けている。出土例は西一里塚・耕田町遺跡の環濠と他遺跡からの既出資料であり、しかも、小形の傾向がある。甕の折り返し口縁は、後沢遺跡を除く、一本柳・清水田・本遺跡にみられるが、いづれも小数の存在である。斜状文についても、後沢遺跡を除く3遺跡にみられ清水田・本遺跡では量的に波状文と大差ない傾向がある。壺の有段口縁及び内側する口縁とその部位に波状文を施文する要素が中期末及び吉田式からの、また、甕の文様斜状文を同様にとらえるならば、一本柳Y1号住居址・清水田Y4号住居址・本遺跡Y1～Y5号住居址が後沢Y14号住居址・Y24号住居址より先行するものとしてとらえられよう。このことは、従来の箱清水式細分論の中で扱われてき、箱清水I式に多くII式では例外的存在であると扱われている甕の折り返し口縁が、後沢遺跡にはなく、他の3遺跡では主體的ではないものの存在している点からもいえよう。しかし、

一本柳・清水田・本遺跡と後沢遺跡は千曲川によって川東と川西とに地理的に分けられ、この両者間に住居の構造の相違がみられる。それは炉の構造であって川西は千曲水系に一般的にみられる地床炉であるのに対し、川東は土器の埋設炉であり天竜川水系にその親縁性を求めることができる点である。本遺跡の壺D及び同心円弧文・短線文や清水田遺跡の壺にみられる同心円弧文の存在は、天竜川水系の弥生時代後期の影響が考えられ、その出自が問題とされている甕の折り返し口縁にしても、また、川東の本遺跡より先行する周防畠B遺跡にみられる北関東西部及び埼玉県北部に親縁性を求める繩文が口辺部から胴上半部に施文される甕の存在から関東地方からの影響も考えられる。前述した地理的環境も考慮すると、当地方の弥生時代後期のさまざまな様相は、千曲川中流域の安定した文化的要素を基調とし、天竜川水系及び関東地方からの影響を受けていたあらわれと考えられるのではないかろうか。

注

- 1 桐原 健 1971「北信濃の後期弥生式土器」(『一志茂樹博士喜寿記念論文集』)
- 2 鈴沢 浩 1977「弥生一中部・中部高地3」(『考古学ジャーナル』134)
- 3 白田武正 1980「佐久地方の後期弥生式土器について」(『信濃』32-4)
- 4 注1と同じ
- 5 注3と同じ
- 6 注2と同じ
- 7 注1と同じ
- 8 佐久市教育委員会 1981「周防畠B」
- 9 白田武正 1974「佐久市若村田西一里塚遺跡発掘調査概報」(佐久市教育委員会)

3 古墳時代

1) 方形周溝墓

本遺跡で検出された2基の方形周溝墓は、調査区域の東・西両端に位置している。HM1号方形周溝墓は周溝底付近のみ残存しており、円形に近い方形を呈し北に陸橋がある。周溝底には3個の円形ピットと土壇をもつ。土壇内からは壺形土器が3個体出土している。またHM2号方形周溝墓は西側崖縁にあり、周溝を含めた大きさは約18mを測る。西側は道路のため未調査であるが陸橋を有する。周溝底より壺・罐・甕形土器がほぼ完形に近い状態で出土している。主体部が検出されず残念である。

HM1号方形周溝墓の出土遺物は弥生時代の土器分類のC・Eの壺形土器と、頸部と胴部が直に接合し、扁球形に大きく張る胴部に割に小さい口辺部が付くものである。胴下部には屈曲して直線的に底部に至るもので、外面はハケ目を残して全面にミガキが施されるものである。弥生の特徴の強い土器と土師器の特徴をもつ土器が共伴していることは過渡期の様相として注目される。HM2号方形周溝墓は、周溝底より出土した土器は、いわゆる「く」字状を呈すもので体部は強く張り、外面ハケ調整後ミガキが施されるものである。赤色塗彩されるものも、色が淡く弥生時代のものとは異っている(36-6)。また上層からは弥生の特徴をもつ、波状文の施された甕形土器、赤色塗彩された高壺形土器がみられる。

方形周溝墓は、発見例の増加と共に研究も進められ、多くの新しい成果を得ている。県内例では弥生時代後期後半から古墳時代初頭に集中しており、平面形態においては方形を原則としているが円形プランもみられる。千曲川水系においては、^(注1)弥生時代後期に円形プランの円形周溝墓例をみると、^(注2)方形周溝墓は伝播の過程で強く在地性を生かしていると言われているが、千曲川水系においても円形周溝という独自の形を作り出したのかも知れない。一般に方形周溝墓の形態は、四隅が切れる型、四隅の何ヶ所かが切れる型、四周溝の巡る型と東日本では時代変遷がみられ、その在り方も群在しているものから、1・2基と単数化するようである。当地方においては、まだその類例が少ないのでその過程を述べることは早計ではあるが、佐久市周防畠B遺跡において、弥生時代後期前半に位置するであろう円形周溝墓が検出され、主体部に土壇をもち壇棺を置いて、円形に周溝を巡らし陸橋を有するものがあり、佐久市後沢遺跡で2基検出された方形周溝墓は、弥生時代後期中葉の住居址を切っており、共伴する土器がないため時期は決めかねるが方形を呈し、やはり陸橋を有している。中期の資料を欠くため検出を待つとして、弥生時代後期の陸橋を有する小形の円形周溝墓から古墳時代には大形の陸橋を有する方形周溝墓への変遷がみられるのではないかと思われる。集落と方形周溝墓との位置関係については、周防畠B遺跡では、墓域と住居址が別に構成されており、後沢遺跡では時期がはっきりしないので不明である。当遺跡では、住居址を5棟検出したが、遺物の比較では住居址群が先行しているため、方形周溝墓の被葬者をそのままこの集落と結びつけることは不可能かと思われる。規模の大きい調査が期待される。本遺跡の方形周溝墓は、H M 1号方形周溝墓が若干弥生時代の残映が強いことからやや古く、H M 2号方形周溝墓は古墳時代初頭に位置づけられるものと思う。

注

- 1 宮坂 光昭 「信濃における周溝墓と古式古墳」『信濃』29-4
- 2 山岸 良二著 『方形周溝墓』ニュー・サイエンス社

(工藤かよ子、林 幸彦)

引用参考文献

- 1 佐原 真 1959「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察—箇櫛文と回転台をめぐって—」(『私たちの考古学』20) 昭34
- 2 高橋 桂 1966「北信濃須多ヶ峯弥生式墓地調査略報」(『考古学雑誌』51-3)
- 3 金井滋次他 1967「安曇寺—中野市安曇寺遺跡緊急発掘調査報告」(中野市教委)
- 4 岩崎卓也他 1969「生仁—更地市生仁遺跡第一次(昭和43年度)緊急発掘調査報告」(更地市教委) 昭44
- 5 神村 透 1969「弥生文化各説—中部山岳地帯」(『新版考古学講座』4)
- 6 斎沢 清 1970「稻清水式土器の再検討」(『信濃』Ⅲ・22-4) 昭和45
- 7 斎沢 清 1970「稻清水式土器発見に関する一試論」(『信濃』Ⅲ・22-11)
- 8 榊原 健 1971「北信濃の後期弥生式土器」(『志茂村博士喜寿記念論文集』)
- 9 佐久市教委 1972「岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報」昭和47
- 10 竹内 恒・土屋長枝 1972「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』13)
- 11 佐久市教委 1973「岩村田椎田—佐久市岩村田椎田遺跡緊急発掘調査概報」
- 12 竹内 恒・草間富士夫 1973「佐久市新子田戸坂追跡緊急発掘調査報告書」(『長野県考古学会誌』16)
- 13 白田 武正 1974「佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報」(佐久市教委)昭49
- 14 斎沢 清 1976「弥生式時代」(『上木内部誌』歴史編)
- 15 佐久市教委 1977「佐久市後沢追跡調査概報」
- 16 斎沢 清 1977「弥生土器—中部・中部高地3」(『考古学ジャーナル』134)
- 17 鹿鳴 稔 1978「弥生式時代」(『更級地図地方誌』第二巻)
- 18 長野市教委 1979「筑崎遺跡群—堀崎小学校地点遺跡の第2次調査報告」
- 19 佐久町教委 1979「日本の本—長野県佐久市宮の本遺跡発掘調査報告書」
- 20 渡辺重義・森嶋稔・森山公一 1979「北佐久郡軽井沢町原遺跡の調査」(『長野県考古学会誌』34)
- 21 長野市教委 1980「三輪遺跡第一輪小学校地点遺跡、第1~3次調査報告、付木内坐一元神社(柳原小学校)遺跡調査報告」
- 22 長野市教委 1980「篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告」
- 23 長野市教委 1980「四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塙崎遺跡群」
- 24 千曲川水系古代文化研究所 1980「暦年」
- 25 白田 武正 1980「佐久地方の後期弥生式土器について」(『信濃』32-4)
- 26 太田 文雄 1980「北信濃の弥生後期福年にについて」(『信濃』32-4)
- 27 群馬・長野・埼玉弥生土器研究グループ 1980「シンボジウム弥生土器—箇櫛文の系譜」
- 28 佐久市教育委員会 1981.3「周防櫻B」
- 29 和島 誠一 1966「日本の考古学III—弥生時代」河出書房新社
- 30 大塚初重・井上裕弘 1969「方形壠溝墓の研究」『殷古史学』24
- 31 郷山比呂志 1970「農業共同体と官長權」『諸國日本史』1〈古代国家〉
- 32 金井翠良一 1972「関東地方の方形壠溝墓」『考古学研究』18-4
- 33 石野 博信 1973「三・四世紀の集団墓」『考古学研究』20-2
- 34 珍木 敏弘 1975「畿内地方における方形壠溝墓の展開」『原始古代社会研究』2校倉書房
- 35 原史墓制研究会 1973-77「原史墓制研究」(1~5)
- 36 「団説日本文化の歴史」(1)先史・原史 小学館 1979

長野県佐久市下小平遺跡

昭和56年3月31日発行

編集者 下小平遺跡発掘調査団

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所



下小平遺跡航空写真(右が北)



1. 下小平遺跡遠景（対岸の黒岩城より望む。画面中央の木々の中に、新しく建築された「福寿園」がみえる。西方より）



2. 下小平遺跡近景（画面上半が調査区域。北東より）



1. 下小平遺跡全景（南西より。左下がM1。Y1・Y2・Y3がみえる）

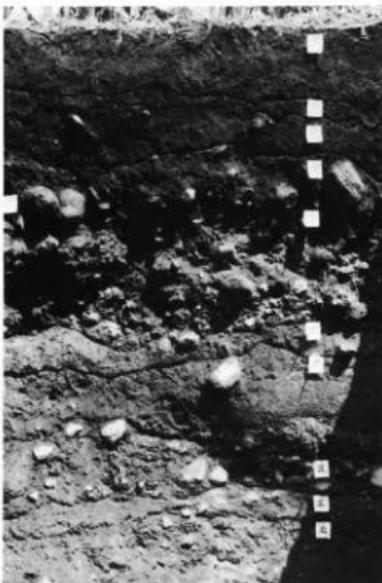


2. 下小平遺跡全景（南西より。右にHM1がみえる）



3. 下小平遺跡全景（北東より。手前はY4）

圖版四



1. 下小平遺跡基本層序



2. Y1號住居址遺物出土狀況



3. Y1號住居址遺物出土狀況（南城）



4. Y1號住居址爐（北側）



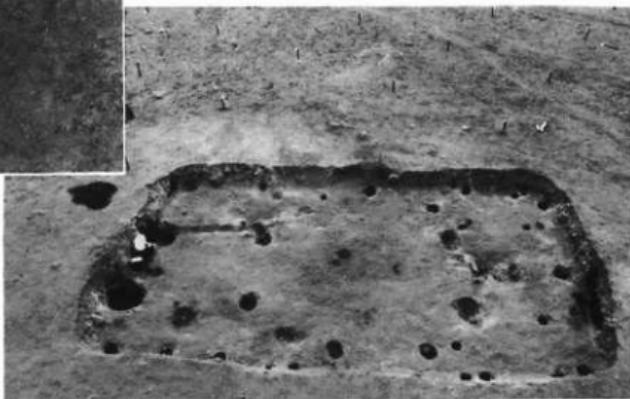
5. Y1號住居址爐（南東側）



1. Y1号住居址全景（南方より）



2. 入口石組



3. Y1号住居址全景（東方より）



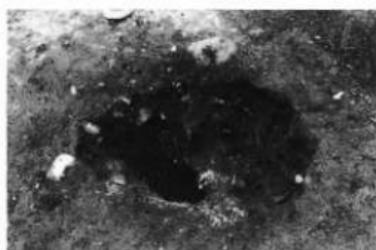
1. Y 2号住居址遺物出土状況（東方より）



2. Y 2号住居址遺物出土状況（南東区）



3. Y 2号住居址遺物出土状況（北西区）



4. Y 2号住居址 P 1柱穴



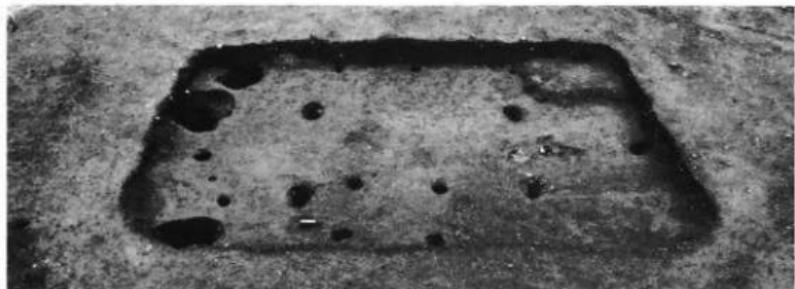
5. Y 2号住居址 P 2柱穴



6. Y 2号住居址 P 5貯藏穴



7. Y 2号住居址 P 6貯藏穴



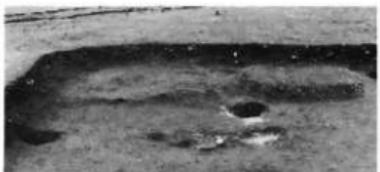
1. Y2号住居址全景(東方より)



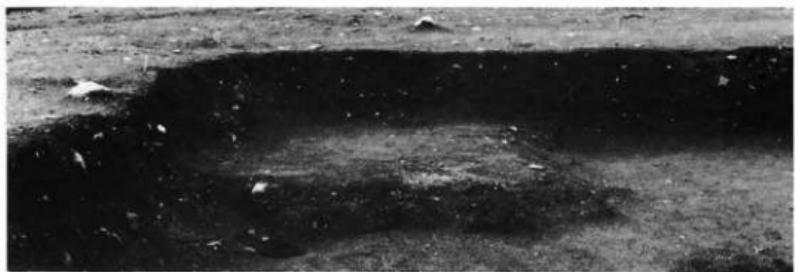
2. Y2号住居址ベッド状遺構(左がベッド1、右にベッド2・3、南方より)



3. Y2号住居址ベッド2・3(南方より)



(西方より)

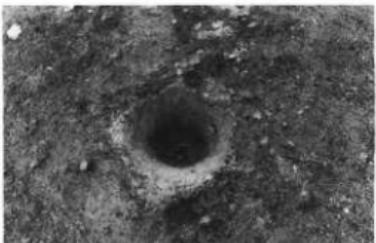


4. Y2号住居址ベッド状遺構(ベッド1 南方より)

図版八



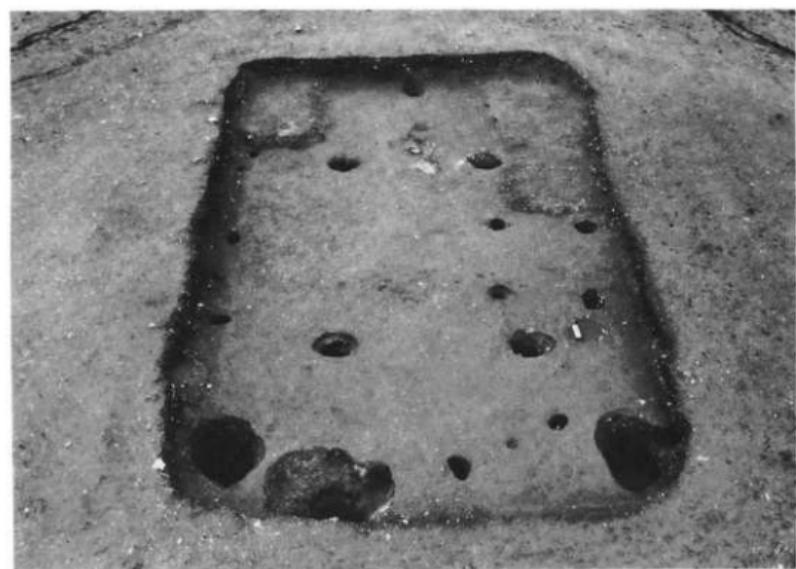
1. Y 2 号住居址炉（北側）



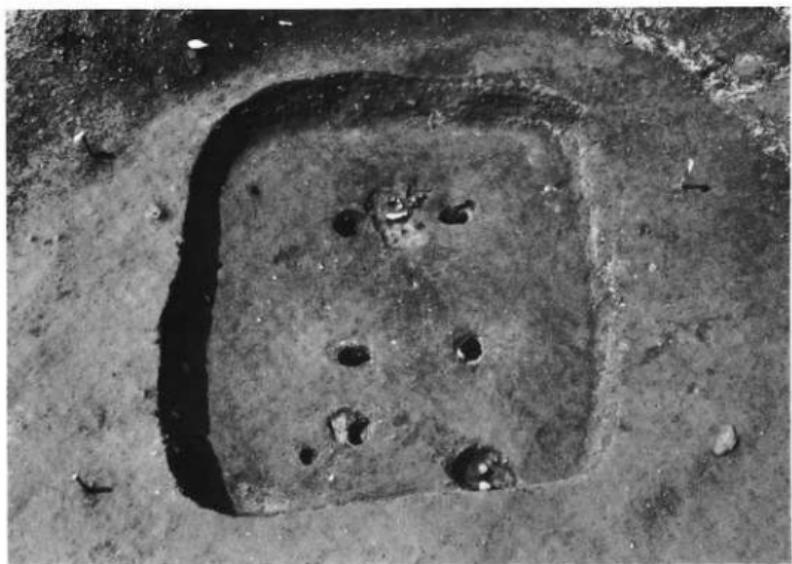
2. Y 2 号住居址炉土器除去後



3. Y 2 号住居址パット状遺構除去後（西方より）



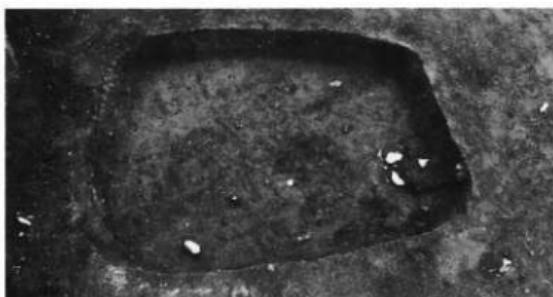
4. Y 2 号住居址全景（南方より）



1. Y3号住居址全景(南方より)



2. Y3号住居址内旧プラン全景(西方より)



1. Y 3号住居址床面（西より）



2. Y 3号住居址入口崩壊石組



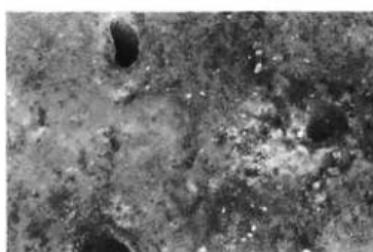
3. Y 3号住居址 P 5貯藏穴



4. Y 3号住居址遺物出土状況（南西区）



5. Y 3号住居址炉



6. Y 3号住居址内旧炉



1. Y4号住居址遺物出土状況



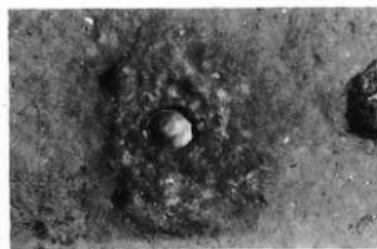
2. Y4号住居址遺物出土状況



3. Y4号住居址遺物出土状況



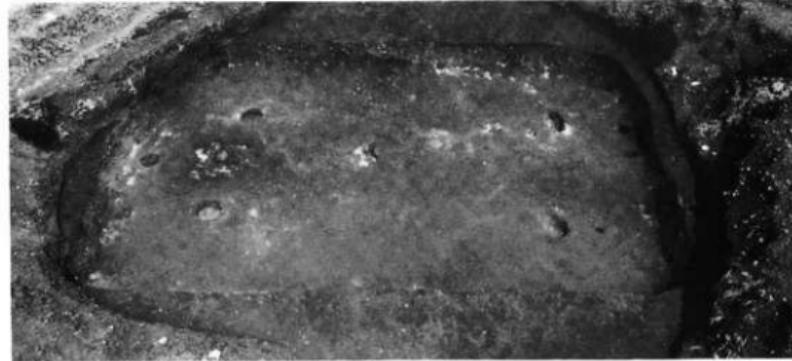
4. Y4号住居址遺物出土状況



5. Y4号住居址炉



6. Y4号住居址遺物出土状況（西方より）



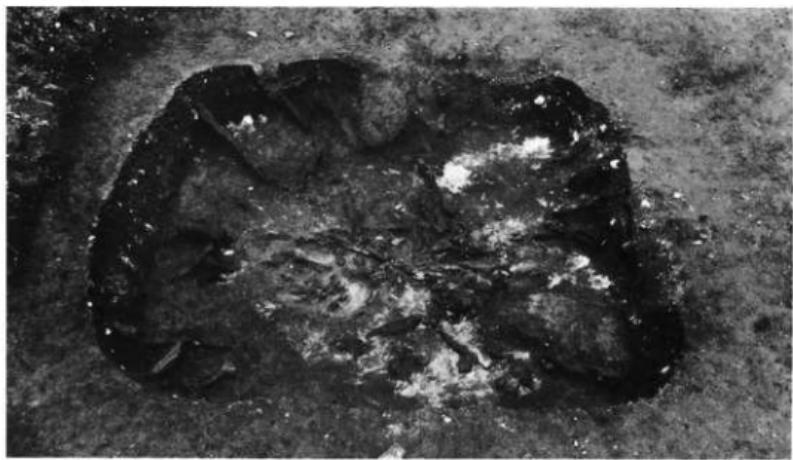
7. Y4号住居址全景（西方より）



1. Y5号住居址全景(西方より)



2. Y5号住居址炉



3. H1号住居址炭化材出土状況(南方より)



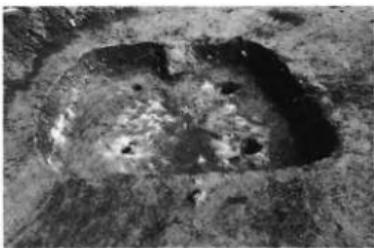
1. H1号住居址炭化材出土状況



2. H1号住居址、茅状炭化物出土状況



3. H1号住居址炭化材出土状況



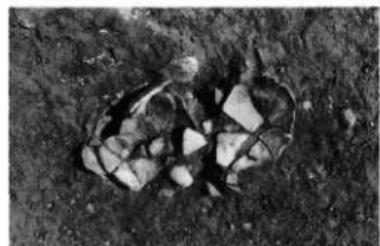
4. H1号住居址全景（南方より）



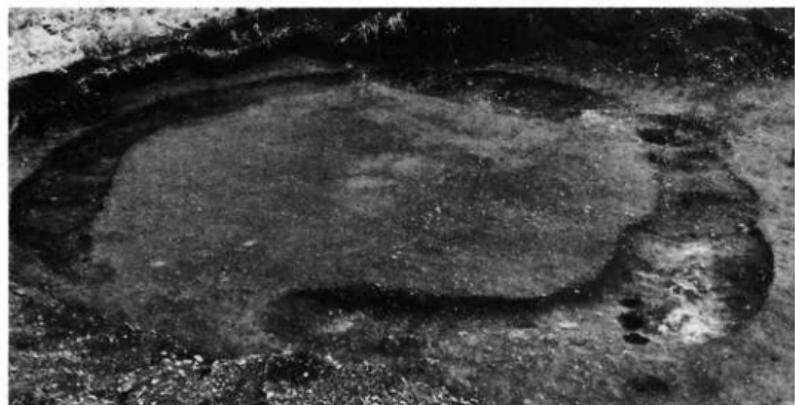
5. H1号住居址全景（南方より）



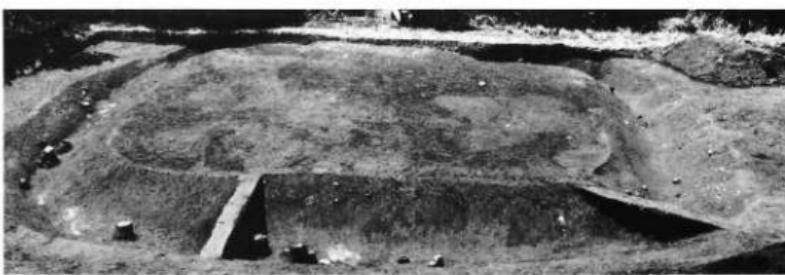
1. HM1号方形周溝墓遺物出土状況



2. HM1号方形周溝墓内D1号土壙壺



3. HM1号方形周溝墓全景 (西方より)



1. HM 2号方形周溝墓全景（東方より）



2. HM 2号方形周溝墓南面



3. HM 2号方形周溝墓土層断面



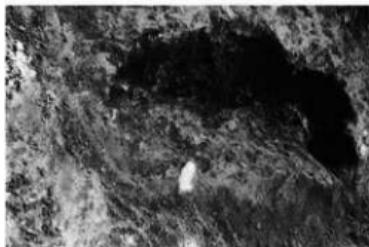
4. HM 2号方形周溝墓遺物出土状況



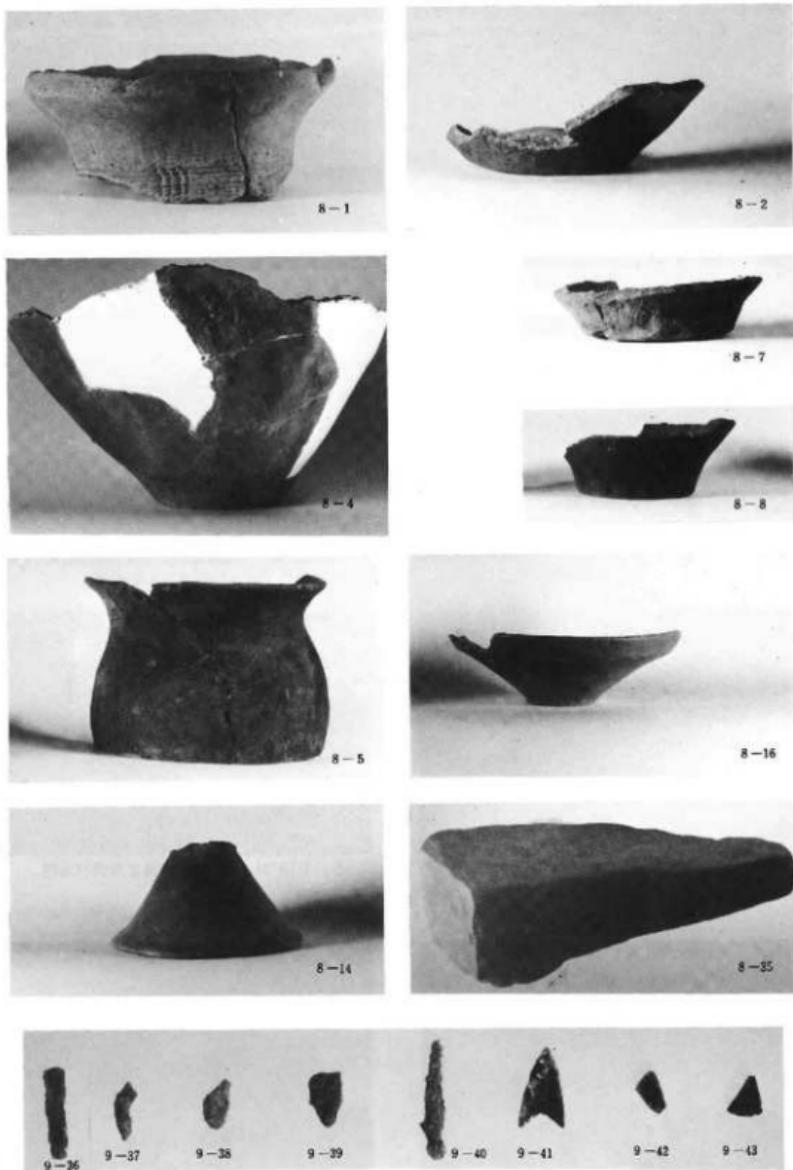
5. D10-11-13号土壤、M 2号溝状遺構



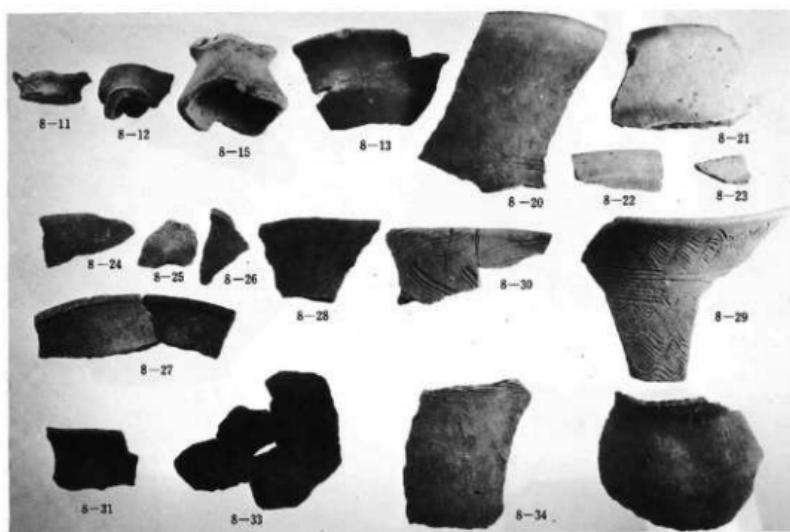
6. M 1号溝状遺構全景（北方より）



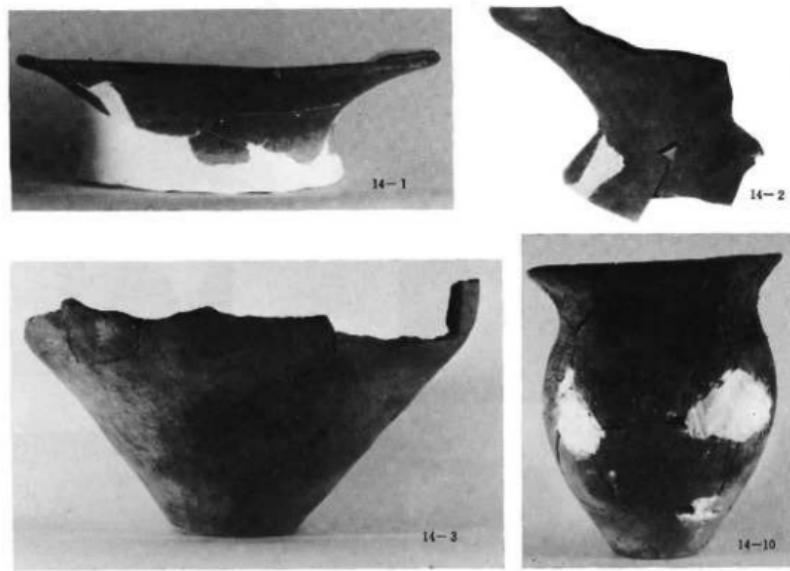
7. D 24号土壤全景



Y1 号住居址出土遺物



1. Y 1 号住居址出土遺物



2. Y 2 号住居址出土遺物



14-9



14-11



14-12



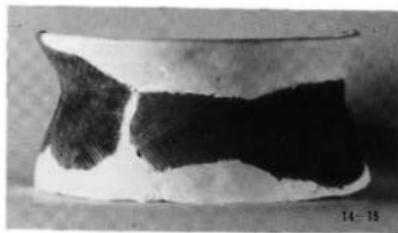
14-13



14-14



14-17



14-15



14-16



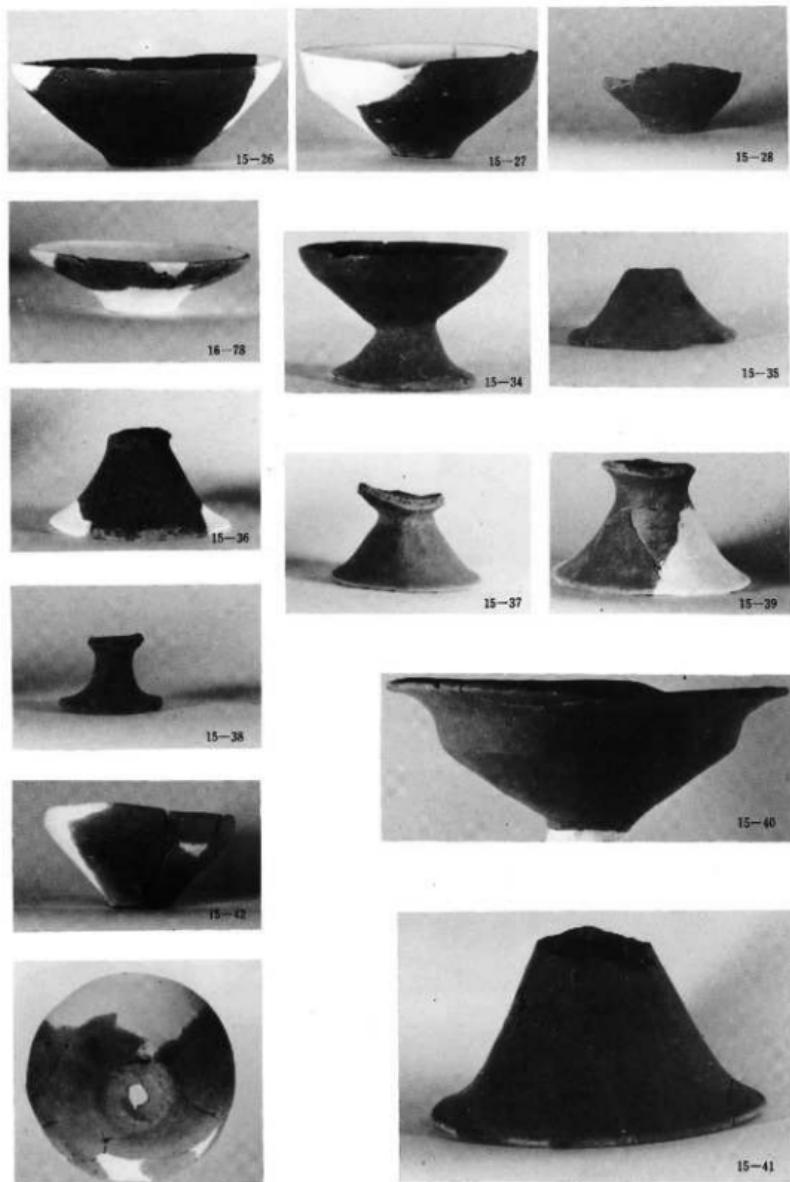
14-18



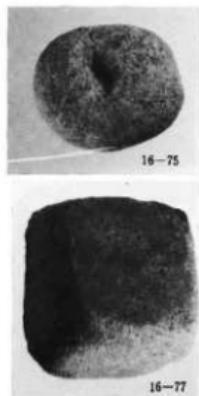
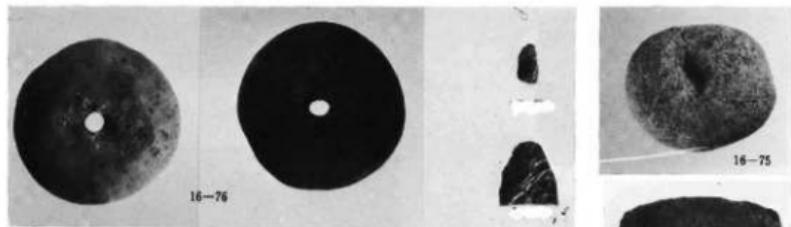
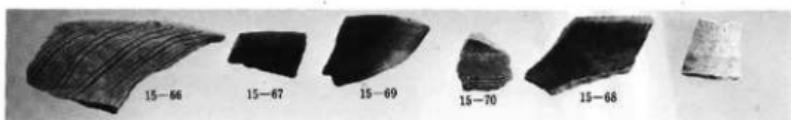
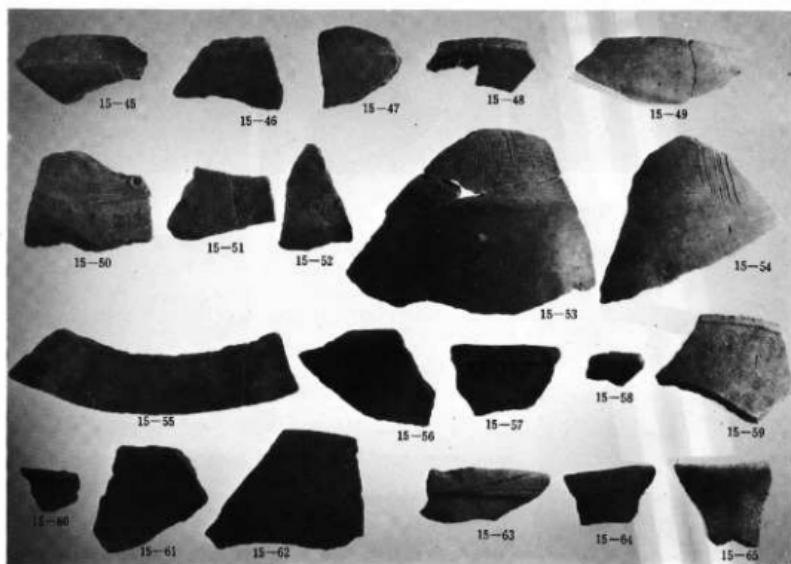
14-19

Y 2 号住居址出土遺物

図版十九

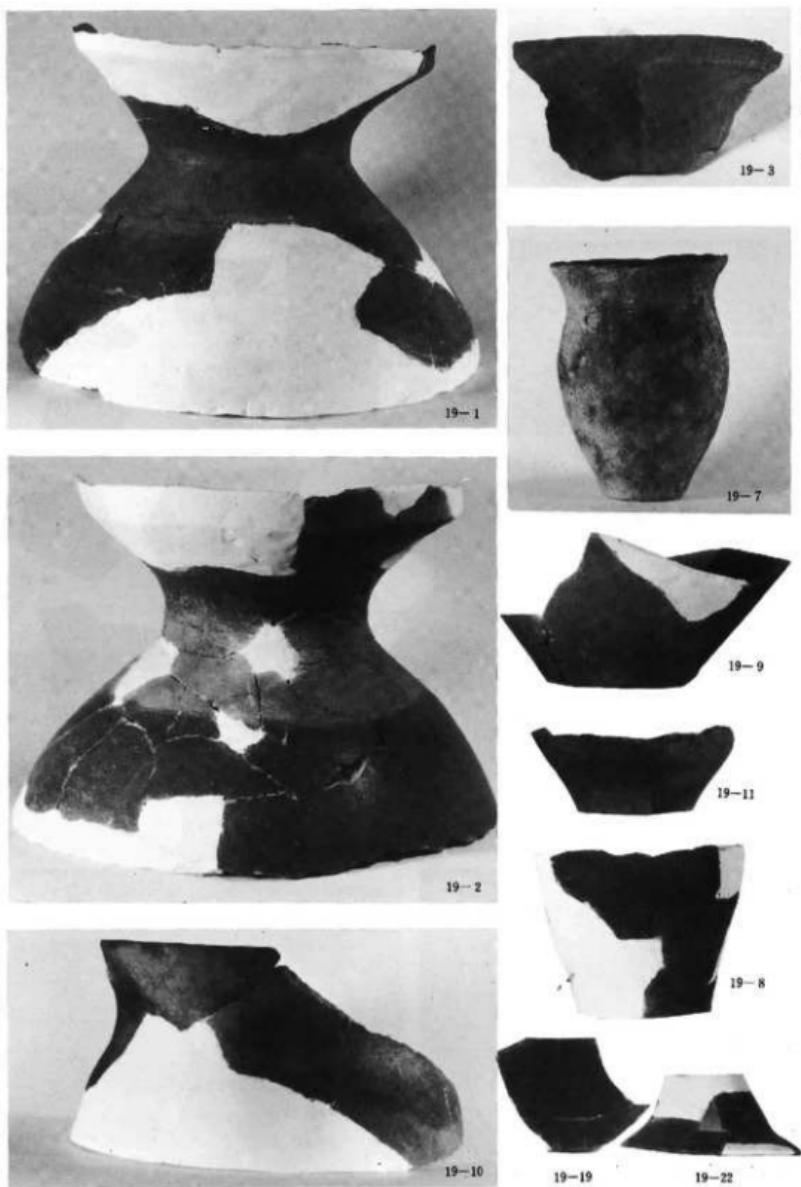


Y 2 号住居址出土遺物



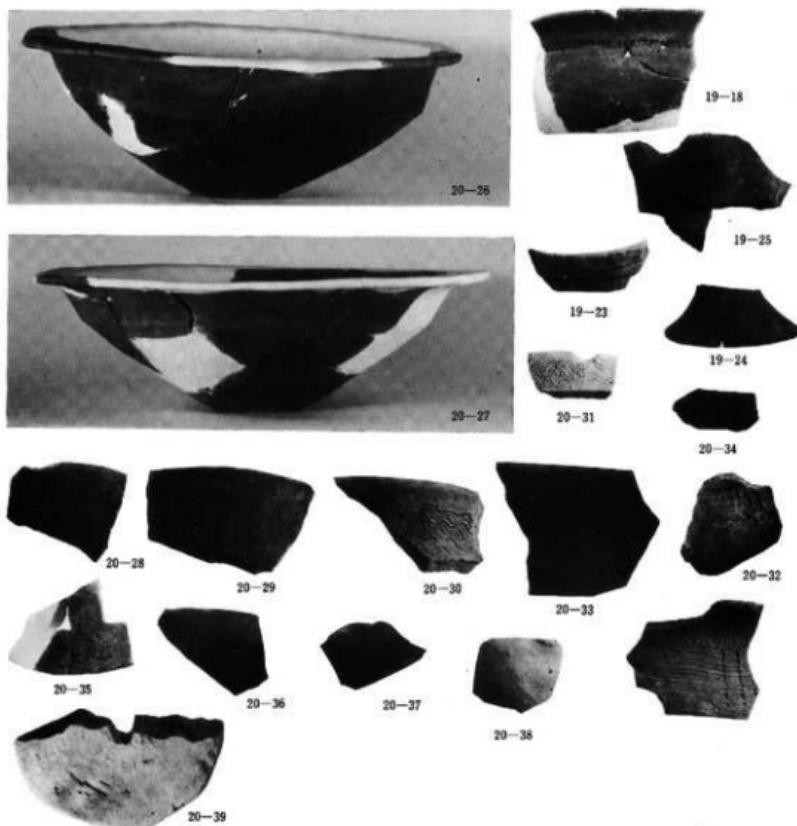
Y2号住居址出土遺物

16-74

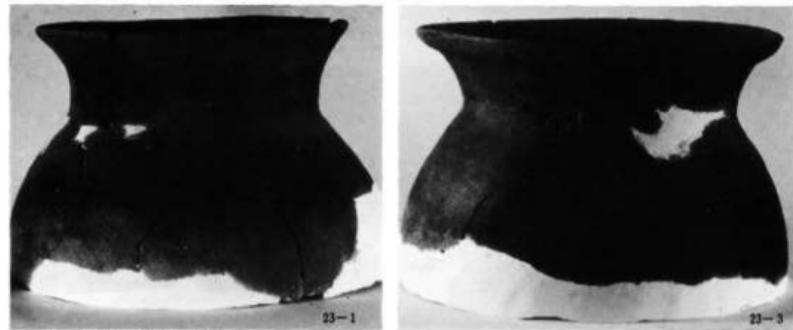


Y3号住居址出土遺物

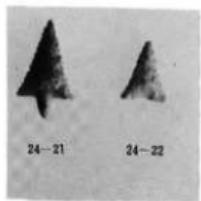
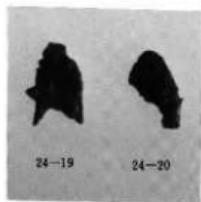
図版二十二



1. Y3号住居址出土遺物

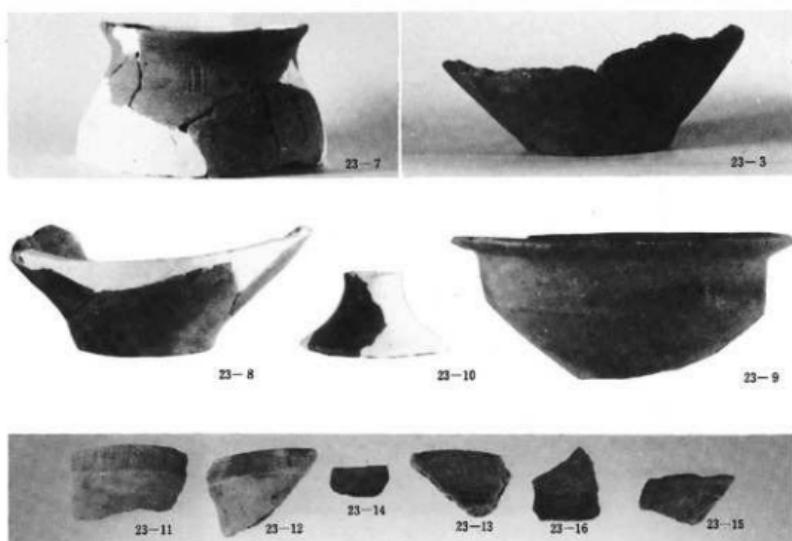


2. Y4号住居址出土遺物

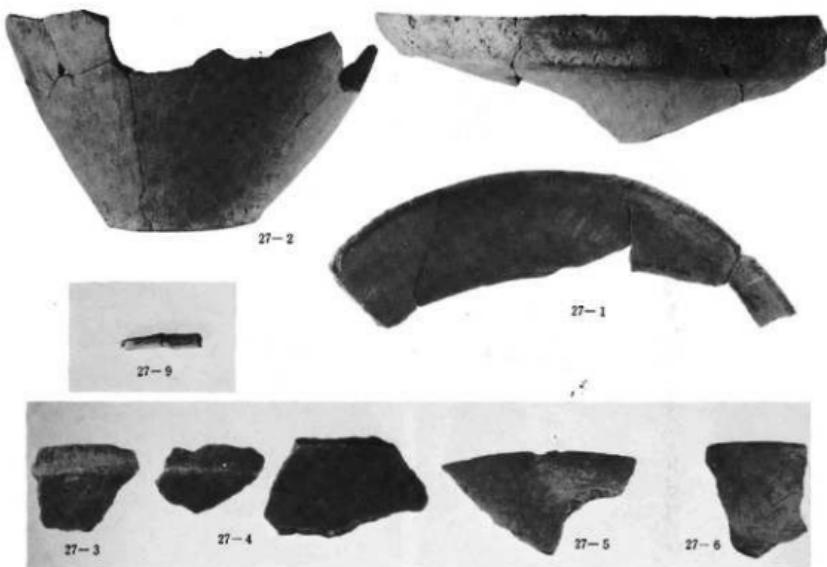


Y4号住居址出土遺物

図版
二十四



1. Y4号住居址出土遺物



2. Y5号住居址出土遺物



30-2



30-1

1. H 1 号住居址出土遺物



36-2



36-3



36-4

2. HM 1 号方形周溝墓 D 1 号土壤出土遺物



36-5



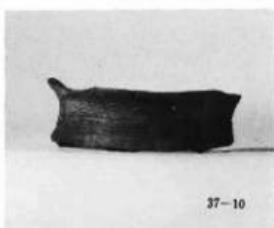
36-6



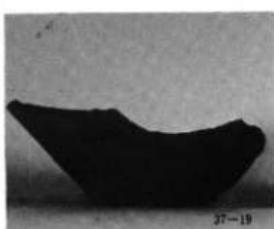
37-1



37-2

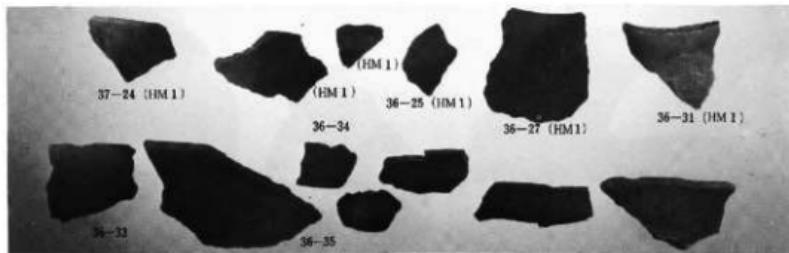
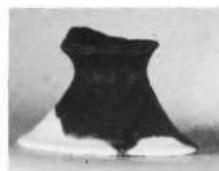


37-10



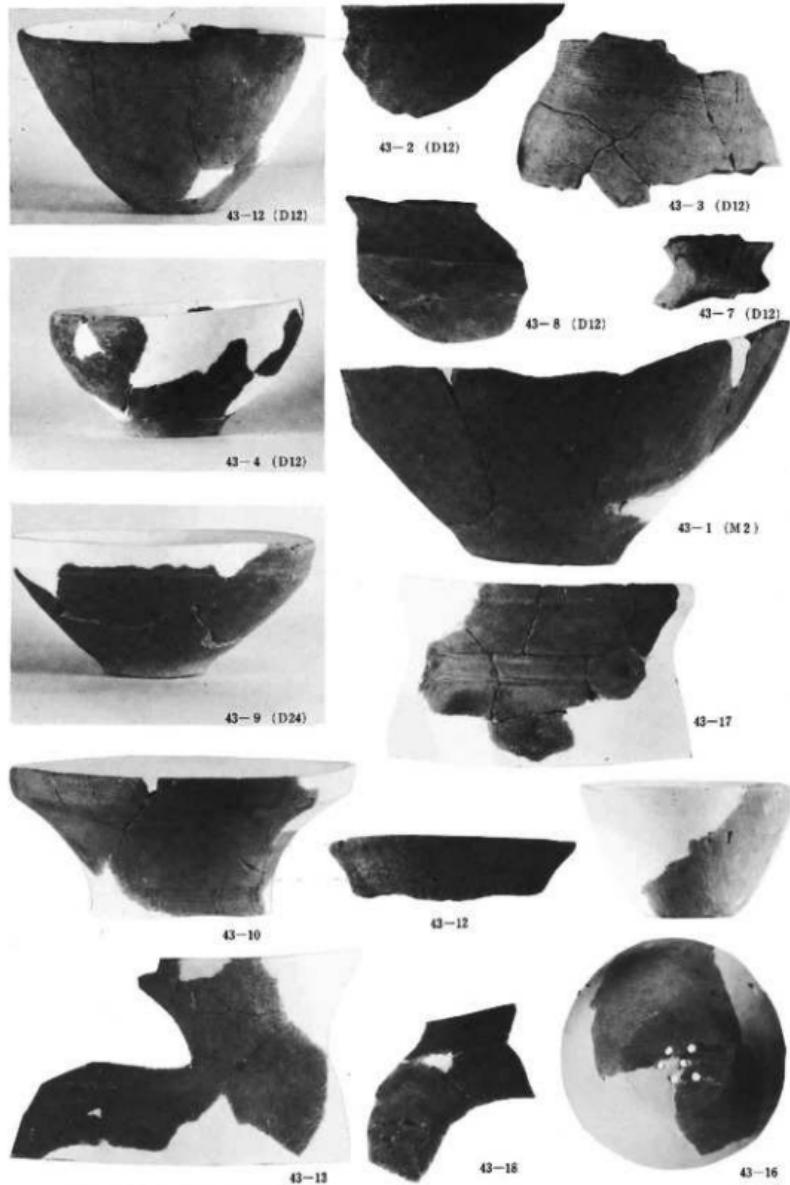
37-11

H M 2 号方形周溝墓出土遺物

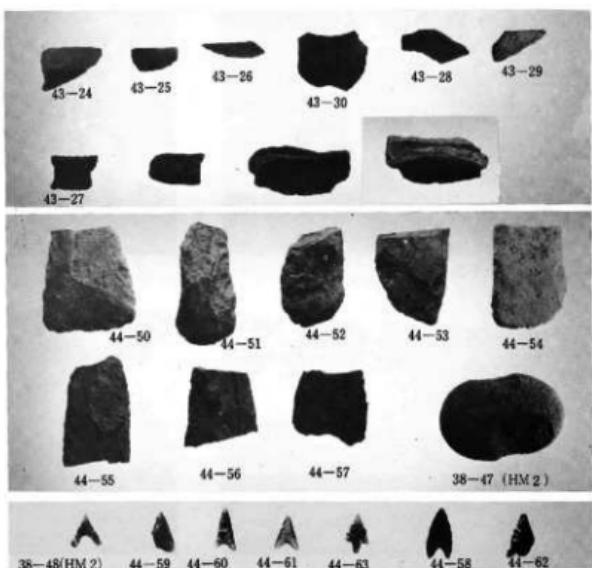


H M 1・2号方形周溝墓出土遺物

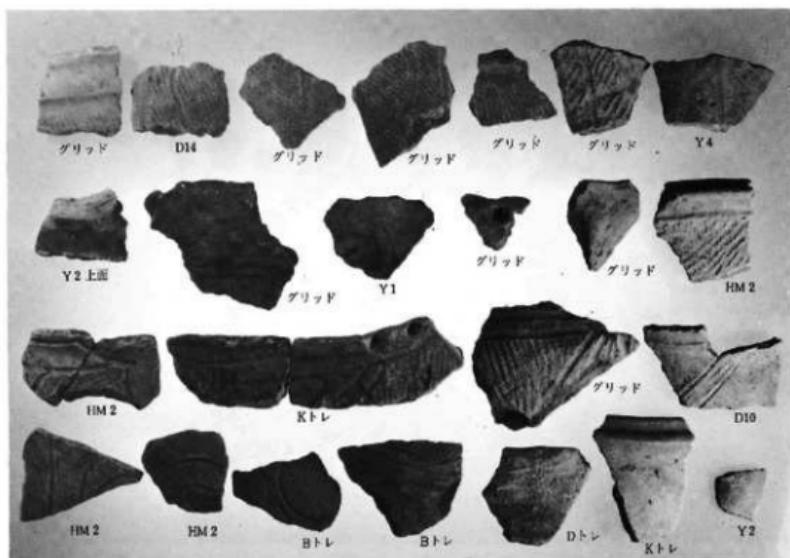
図版二十八



土壤・グリッド出土・表探遺物



1. グリッド出土・表掻造物



2. 下小平遺跡出土 縄文式土器



1. 打ち合せ会



2. 市長見学



3. 発掘風景



4. ミーティング



5. 発掘調査団